

始





71-598



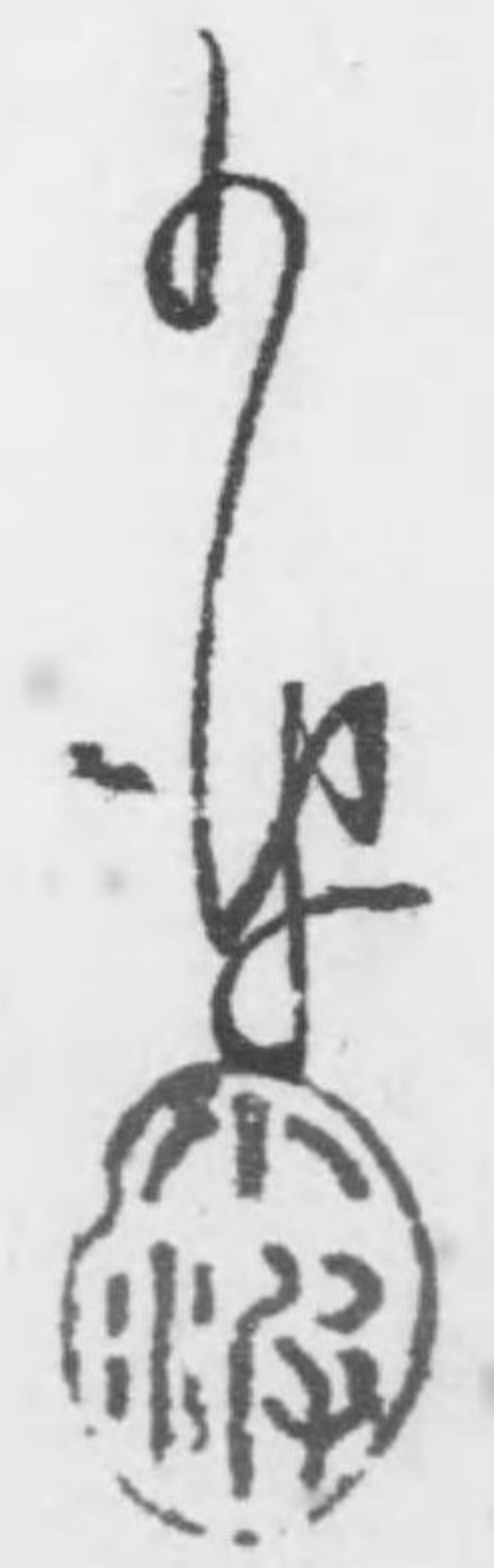
句評及俳話

武內藤鳴雪合著

雲泉堂藏版



可  
有  
之  
心  
小  
字  
之  
心  
也



内  
外  
合  
卷

同  
精  
又  
得  
盖

三  
泉  
堂  
藏

はしがき

初めて俳道に入らうとする人の爲めに、更に俳句の  
いかなるものであるかを知らうとする人の爲めに、敢  
て此書を上梓する著者は必ずしも之を以て完全した  
ものとは云はぬ、句評も宗鑑から僅かに其角に及んで  
其稿を止めて居れば、俳話もまた充分の境地にまで説  
き至つては居らぬ。而も此書に於て俳句の意義、俳句  
の要訣、俳句の綱領は、大體に於て了解し得る事であ  
はしがき

らうご信しんずる。讀者さくしや若もし尙なほ完全くわんぜんを望のぞむならば、それは暫しばらく著者ちよしやの企圖きとに待つてお貰もらひ申まをしたい、著者ちよしやは近ちかき將來しやうらいに於おて、更さらに第二だいの稿かうを繼つがんごしつゝあるもの諸君しよくんの望のぞみはやがて其時そのときを以もつて満足まんぞくされねばならぬ筈はずである。

二

大正五年九月

著者識

ゆしかげ

初めに俳道に入らうとする人の為めに、更  
に俳句の口があるものとあるかを知らうと  
る人の為めに、敢て此書を上梓する。著者は

母としも期を以て定まらぬものとほははぬ

句評と兼鑑から選り出され、及んで其稿を

めを所れば、解読しまた充分の境地に至る

ては所らぬ。而して書を移し、俳句の基礎

俳句の意義、俳句の要素、俳句の綱領は、大

體を知る所し得る事であらうと信する

著者し 断 著 者 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著

は 著 者 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著

し 著 者 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著

福 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著

や 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著

此書は...  
著者は...  
俳句の...  
基礎を...  
明らかに...  
するもの...

著者は...  
俳句の...  
要素を...  
詳しく...  
説明する...

著者識

著者識

考らるる  
へし中  
三三三  
一三三  
不三三  
三三三  
三三三  
三三三  
三三三  
三三三  
三三三

めと所れば、解法しまん充分の邊地ありし

ては所らぬ。而し以書お移し、解句の義後

解句の意義、解句の要意、解句の綱領は、大

體お移し了解し得る事であらうと信する

（廿行廿字）

考らし難し 尚書定歴を望む

は ことばを考らし難る考者の難事

しにい。若者は此を待たず移し、更なる

福と福がんとしつゝあるりあり、諸君

やがてそれす時と以て満足せられおは

である

大正五年九月

此はがまは世田橋徳先生執筆し

其の行記を乞はれたるもの、今其兩先生の情

懐いかに厚きかを思ひこめてこれを印行し

て特記之を掲ぐ

中泉 伊藤美記

（廿行廿字）

考らるる  
へし中  
三三三  
一三三  
不三三  
三三三  
三三三  
三三三  
三三三  
三三三

考らし難し  
は ことばを考らし難る考者の難事  
しにい。若者は此を待たず移し、更なる  
福と福がんとしつゝあるりあり、諸君  
やがてそれす時と以て満足せられおは  
である

（廿行廿字）



目次

俳句評釋

一	宗鑑	一
二	守武	七
三	貞德	一一
四	望一	一七
五	德元	二一
六	未得	二四
七	立札	二八

目次

一

八	ト	養	二九
九	忠	知	三二
十	貞	室	三八
十一	季	吟	四二
十二	湖	春	四五
十三	宗	因	五一
十四	芭	蕉	五八
十五	其	角	一四

南柯俳話

一	俳句と自然	一四七
二	國民性と俳句	一六一
三	句に與へられたる慘虐と自由	一六九
四	句に生きんとする悶へ	一九七
五	鳴雪俳句鈔を繙いて	二〇三
六	青き無花果の實	二一五
七	子規居士展墓句會	二二四
八	梁前想句録	二三二

俳句評釋

内藤 鳴雪

句評及俳話目次終

- 九 俳士と臨終……………二四〇
- 十 ある夜の思出……………二四三
- 十一 足跡を辿りて……………二四九
- 十二 俳句の物質的能力と其効果……………二五六
- 十三 藝術と周圍……………二六〇
- 十四 庭に小さな池を掘つて……………二六五
- 十五 其角の人格……………二七四

辨 論 集  
内 載 曲 書

一 宗 鑑

俳人諸君のお求めに依つて古人の作句を聊か歴史的に解釋して見ようと思ふ。そこで先づ俳句の開祖と云へば、誰れも知る如く山崎宗鑑である。けれども此人は只だ開祖だと云ふのみで、作句の上はまだまだ幼稚至極なものである。ツマリ久しく盛んに行はれて居た連歌が餘りに形式に泥み、又同じやうな事を繰り返して無味に落ちつゝあると云ふ感が當時の人々に起つて居た。ソコへ一番投じて、専らに俳諧、即ち滑稽的な、當時で云へば破格的なものを宗鑑が唱へ出した。是が抑々俳句の起つた機會である。尤も是までの和歌や連歌に於ても一部

句評及俳話

分ぶんに俳諧はいかい即すなはち滑稽こつげい的てきのものが無いのではないが、それを専もつぱらにする  
云いふことは此宗鑑このそうかんが始めであつて、中々なか／＼一時は賞玩しょうくわんされたものであ  
る。それ故ゆゑ此人の句はどれも／＼俳諧はいかい即すなはち滑稽こつげいを弄ろうしてゐる。然しかしな  
がら其滑稽そのこつげいと云つても後の蕉門邊りの滑稽こつげいとは全く違つて、其大部分  
が趣味しゆみの上の滑稽こつげいではなくて、徒いたづらに口合くちあひとか或は理窟りくつ臭くさい所の滑稽こつげい  
である。故ゆゑに詩として之を論ろんすれば何等の價値かちもない作品さくひんであるの  
だ。其事實そのじまつは是から句を解釋かいしやくする上に於おいて分わかつて來きます。

うづき來てねぶこになくや時鳥

うづきは卯月うづきはうづきだが、又上方邊りまたかみぎたあたで身體からだの疼いたむことをもうづくと云ふか

ら、ソレにも通かよふ。ねぶとは音太おんただが、瘡かさで局部きよくぶが腫はれ上あがつて居ゐる  
のを根太ねたが出來でたと云ふから、ソレにも通かよふ。なくは鳴なくだが勿論もちろん泣な  
くにも通かよふのである。そこで此句の表面へうめんは卯月うづきが來たので音太おんたく鳴なく  
ことである、アノ時鳥ときすずが、と歌つて置いて、更さらに一面めんにはうづき、即すなは  
ち疼いたみ來きたつた瘡かさの根太ねたに耐こらへ切れず、男泣おとこなきに泣なくことだと、或ある  
人事じんじにも聞きかせて居ゐるのである。して見ると此句は、表面へうめんの時鳥ときすずを詠い  
じた事こととしても、餘あまりに平凡へいけんである。又裏面またりめんの瘡かさかき話はなしは、單たんに卑ひ  
猥わいと云ふの外ほか何等の好よい感かんじもない。畢竟ひつきやうするに一の言葉ことばを兩様りやうやうに働はたら  
かせたと云ふのが唯一ゆゑの趣向しゆかうであつて、即すなはち口合くちあひ的てき駄洒落だしゃらくを十七字に  
述べたと云ふに過ぎぬのである。従したがつて詩美しびとしての價値かちは全くゼロ

である。

四

### 寒くごもひになあたりそ雪佛

雪佛は例の雪ころがしの達磨などであるが、ソレを生きて居るもの、  
如く見なして、此大道に御座るのは嘸かし寒からう、されど日（或は  
火と見ても可い）にはあたられませぬぞ、あたられたら身體が解けて  
しまふからと、其雪佛に云つたのである。是は如何に昔であるとして  
も餘りに陳腐な滑稽で、又多少理窟臭い處もある。けれど、之を前の  
句の趣向が、時鳥の事をソツチ除けにして置いて、口合のみで落ちを  
取らうとするのに比ぶれば、まだ幾らか雪佛其ものに向て想を寄せて

居る處があるから、此點丈は句作上に於て一歩進んだものと云つて可  
からうと思ふ。

### 手をついて歌申上ぐる蛙かな

貫之の古今集に鶯や蛙でも歌を詠むと云つて居ること、蛙のそこへ  
出て来た形状とを合わせて趣向を立てたもので、矢張凝人的の滑稽で  
はあるが、前の雪佛の句ほどに理窟臭いこともなく、只だ打見た儘に  
蛙其ものを可笑しく詠じたのである。して見れば、此句に至つて、ヤ  
ツト始めて詩的趣味に到達したのである。宗鑑の句中で此句の如きは  
稀に見る成功の句で、或はまぐれ當りと云つても可からうか、然し此

外に今一つ上出来のものがある。

### 元朝の見るものにせん富士の山

富士はイツ見ても飽かぬ眺めだが、此氣品の高くめでたい山を、唯だの日に眺めて居ては餘りに勿體ない、是は取て置いて新年元朝の見るものにせうと、富士山を十分に賞讃して詠んだのである。此句に於ては、少しの理窟も口合もないことは勿論、當時専らに務めてゐる、俳諧即ち滑稽の點さへも見えぬのである。此句の如きは之を蕉門の七部集中へ置いても決して見分けはつかぬであらう。さう云へば、前の蛙の句はナンデも『曠野集』の春の部へ採用されてあるかと思ふ。

### 二守武

前回は俳句の開祖たる山崎宗鑑の句を解いたから、茲にはそれと並び稱せられて居る荒木田守武の句を解かう。時勢の風潮は妙なもので此人も従來の連歌の舊套より脱出して俳諧即ち滑稽を専らとした作者である。

### 花よりも鼻にありける句ひ哉

句ひとは花其物に屬せずして鼻の神経の感覺より生ずると云ふ談ならまかつ今日に於ける理學の問題であるが、マサカ此時代にそんな事を考

八  
へもせまいから、是は矢張り花と鼻どが同音である處より、双方を取合はせて一寸洒落を云つたのである。此外何等の意味も有たない丈、詩美としての上には何等の價値もないのである。

### 梢より來てこそ吠ゆれ犬櫻

犬櫻は白い小さい花が咲いて櫻の中の一様であるが、夫等の状態を詠んだと云ふでもなく、單に名が犬と呼べる處より櫻を犬と倣して無理なこぢつけを云つたのである。吠ゆるとは櫻の梢が風に吹かれて音立てゝ居る事なのか、兎角櫻其物の眺めに對しては何の感興もない駄洒落である。然し之を前の句と比較すれば、彼の抽象的なのに反して

此の具體的な丈が、多少題詠らしくなつて居るとも云はれうか。

### 撫子や夏野の原の落し種

撫子が咲て居る、そこは夏野の原中で、而して態と植ゑられたものでなく、翻れ落ちた種から咲いたものであると云ふのだ。此句となれば聊か撫子の優しき姿態も現はれて、尙周圍の景致までが観察せられる。因てヤツと詩として見ることが出来るのである。然し原を腹に懸けてそれから落し種なごゝ人事によそへて云ふ處が餘計な趣向で、コ、が吾々から見れば一大缺點だけれども、當時に於ては却て一句の生命はコ、にあるとして稱賛して居たものであらう。尤も現今に於ても月並



派は矢張こんな點を貴ぶ風が残つて居るやうだ。

一〇

### 元朝や神代の事も思はるゝ

新玉の歳の始の朝であるから、吾人共に平日のアクセクした生活の事も打ち忘れ、何處となく気分も改まり心も淨く和らぐ感がある。そこで神代の昔は嘸かし總てが神々しく純潔な有様であつたらうと思ひ遣ることになるのである。而して一面には其神代の昔に我も暫くは身を置くやうな感がすると云ふのである。此句に至つては少しの口合もなく、駄洒落もなく、又理窟的の談もなく、十分に元朝に出合つた吾人の感が歌はれて、尙言ひ盡せぬ餘韻餘情をさへ帯びて居る。此時

代の作としては宗鑑が富士の句と共に、俳句界の奇蹟と云つても可いのである。

尙此守武の句は宗鑑の如く卑猥に落ちたものはない。それ又宗鑑ほどの活氣は缺けて居るやうだ。因つては此等の點も兩人の句を擧げて解いて見たいのだが、時間が許さぬから是丈にして置く。

### 三 貞 徳

宗鑑守武の歿くなつた後は暫くの間名のある俳人がなかつたが、徳川時代に入つて誰れも知る所の松永貞徳が出た。此人は王公貴人にも斯道の上では師と尊ばれ、始めて俳諧花の本と云ふ名稱を得たのであ

る。けれど其俳句となる。當時の好尚だとは云へ、實に拙悪なもので、詩的趣味の上から評すれば、最初の宗鑑守武よりも更に劣つて居るのである。

### 花入の口より吐くや玉椿

花入は花筒の事で、それに活けた椿の花を詠んだものであらうが、椿が唾と同音である處より例の口合を云つたのである。即ち一方では、花入の口から吐き出した様に玉椿が活けられて居ると云つて、他の方では、それを人間の口から一塊の唾液を吐いたと云ふ事に聞かせて居る。實に汚穢極まる比擬で、是では椿の花の美な眺めもメチャ／＼

になつてしまふ。畢竟口合の上へのみ趣向を弄して、其點で人を笑はせたら、モウ俳句の目的は達すると思つて居たのである。吾々から見れば此句の如きは椿の美を態々醜化してしまつたもので、是が花の本の句だから驚くぢやないか。

### 和歌に師匠なき鶯と蛙かな

例の貫之の古今集の序から來て居るが、丸切穿ちで、それも幼稚で平凡な穿ちである。是から見ると宗鑑の『手をついて歌申上る蛙哉』などは、客觀的の形容より來るから、自然と蛙其物につき感興を起させることが深い。此兩句を比較した丈でも、貞徳と宗鑑との詩的趣味の

上の優劣は判定が出来よう。

一四

### 喰ふよりも氣の藥哉鹿の聲

肉食を藥だと云ふ事は此時代から云つて居たもので、それを趣向にしたのである。然し鹿の聲を聞く際に其鹿を喰ふ事柄を思ひ出すのは、何たる没趣味殺風景な事であるか。是もつまり理窟ほい落ちを取るを目的とするからである。一寸思ひ出したが、論語に孔子が或日『山梁雌雉時哉時哉』と獨語せられたのを、門弟の子路が聞いて、其肉のうまい季節になつたと仰せられたのだと思ひ違へ、早速それを調べて差出すと、孔子は『三嗅而作』とあつて一寸鼻で嗅いだ許りで立去つてし

まはれた、元來孔子は雉の時を得て鳴いて居るのを興がられたのであるに、不骨な子路は直ちに喰ひ氣と解したのが可笑しい。處で此貞徳は花の本でありながら、此子路と同様な没趣味漢であるやうに思はれる。

### 生鳥に皆鹽するや今朝の霜

此鳥は何鳥と見ても可い。兎角其鳥の周圍に白く霜の下りて居るのを食用の鳥へ鹽をした事に見立てたのである。是も矢張食い氣で、然かも鳥を生きたがらに鹽すると云ふは殘酷な感を免れぬ。故に詩美に於てはゼロであるが、只だ一つ助けて云へば、是れは具體的な眺めの上

より趣向を立て居て、抽象的でない丈前々の句よりも一步を進めた趣向である云つて可からうか。

### 足はやき雲や時雨の先き走り

先き走りは或る行列などの通るの知らせつゝ先きへ〜と走る小前者の事で、それを時雨の來んとする空の雲脚の駛いのに譬へ、而して雲は即ち時雨の先き走り役だと戯れたのである。是は譬へこそ少し俗味に落ちたとは云へ、先づ時雨其物に就き切實なる景を叙した處に趣向の進歩がある。即ち洒落は洒落でも、題をそつち除けにした洒落とは違ふのである。けれど此作者には此句邊りが最上等のもので、宗

鑑守武の如く、蕉門の句集へ入れても可いと云ふやうなるものは餘り見當らないやうである。

### 四望一

貞徳と略ぼ同じ時代で、又同じく長壽を保つた俳人に杉田望一と云ふがある。此人は伊勢の山田の生れであるから、自然と守武の風を學んだものか、時勢の傾きとして口合や洒落を云ふことは免れねど、比較的其句に品致があつて下卑て居ず、又餘りに理屈つぼくもない。要するに貞徳に比すれば幾分か詩的趣味に近づいて居るのである。従て此人は盲人であつたが、それにも拘はらず、心眼は貞徳よりも明るか

つたかと思はれる。

鶯も暦をもつか今日の聲

春立つ日に丁度鶯が鳴き出したから斯く戯れたのであらう。矢張り屈臭い點はあれど、其初音を聞いたのを嬉しく思ひ、それに浮かれた餘りの言だとすれば、多少許せぬこともないのである。

夜寒さを恵め熱田のかみ衾

熱田の熱いと云ふこと、神と紙とを懸け合はせた趣向で、矢張駄洒落たることは免れぬが、さらくと言ひ下して居る丈に、左程厭や味を感じない。其處が此作者の長所なのであらう。

入月や其極樂の案内者

極樂は西方十萬億土の遠い處にあると云ふから、西空へ入る月を擬人法で斯く戯れ歌つたのである。此句に至れば、月の眺めの方はそつち除けにして大分其臭みが強いやうである。然し此作者に於てはこんな句は先づ少ない方であらうか。

おのづから鶯籠や園の竹

鶯が竹の茂る間をアチコチして居る、それが其儘に彼を飼つてある

竹籠のやうに看做されると云ふのである。頗るコジツケで無理な點もあるが、前の句の如く眺めをそつち除けにしたものよりはやゝ好い。

### 雨の夜の鬼一口か時鳥

鬼一口は伊勢物語の芥川の條に業平が連れ出した女を奪ひ返された事に使つた歌の言だが、此句はそれを時鳥の鳴かぬのに轉用したのである。即ち吾が戀ふる時鳥は、斯様な雨降る闇夜であるから、鬼に出合つて一口に喰はれたのではあるまいか、モウ鳴く筈なのに其聲がせないと云つたのである。此句の如きは修辭上までが詩的趣味で、此人の作では優等のものであると思ふ。

### それぞ聞くそら耳もがな時鳥

時鳥を聞かうと待てごもく鳴かぬ、此上は何か外の聲を時鳥だと聞き做す、即ちそら耳でもしたらば好いと云ふので、よく其待ちこがれた情態が歌はれて居る。此句に至つては、當時の習弊を全く脱して儘かに元祿の正風に達したと云つても可からう。貞徳にはこんな句は逆も見つからぬのである。

### 五徳元

そこで望一は先づ是丈にして、尙此頃齋藤徳元と云ふ人がある。是

は貞徳門に入つた人で、其句もそれに似て居るが、去迎甚しく理窟  
ばい滑稽句も餘り多く見えぬやうである。

二二二

### 鶯の子なら春啼け時鳥

鶯のかひ子の中の時鳥などとあつて、時鳥は自分で子を生ますに他  
の鳥の子を養ひ育て、我が子とすると云ひ傳へられて居る。そこを取  
て趣向にしたので頗る理窟臭いが、さらりとした句調丈に、師の貞徳  
が『和歌に師匠なき』と云つたのよりはやゝ勝つて居るかと思はれる。

### 鶉焼や茄子なれごもごり肴

鶉焼と云ふからそこで取肴に鳥肴を聞かせて、植物の茄子であるに拘  
はらず、動物の鳥と變化したと訝りに云つたのである。此句の如き  
は全くの駄洒落で、何等の詩的趣向も認められない。

### 村雨のさやに隠るか夏木立

木立が小太刀に通ふ處から、村雨に降り籠められた夏木立を、鞘に小  
太刀が納められて隠れたと言ひ做したのである。是も駄洒落の點は前  
句と差はないやうだが、多少其景況が眺めに入る丈、其丈一步進んだ  
ものと云はれうか。

### 寒き夜の寝酒や五つ六つの花

六つの花は雪の別名で、そこへ酒の盃の数の五つ六つを懸けたのだが、斯様な程度の懸け方は芭蕉の正風以後にも随分とあつて、就中蕪村などの句によく見る所である。即ち是ならば詩的趣味を害するどころか寧ろそれを助くる場合もあるのだ。要するに懸け言葉を此程度に利用すれば、語氣を滑めらかにして調子良く聞かしめると云ふ効がある。そこで此人の作では此句などが先づ上乘の部であらうと思ふ。

### 六 未 得

齋藤徳元の句を解いた因みに、今回は同じ江戸俳人の石田未得の句を解かう。此人も矢張貞徳門下で、徳元と共に五哲と稱せられて居たものである。

### 花と實と種やまくばひ神の春

神の春とは新玉の春を神の方面にあげ稱へた意味である。そこで句意は、一年中吾々が接する美しき花や旨い實は、其種を此新玉の春の奇しく畏こき神業で蒔かれたものである、と云つたので、而して例の言葉の上を諾 冊二尊の美斗能麻具波比から取つて、實とと美斗、蒔くと麻具とを懸け合はせて居る。つまり神の春と云ふことからの趣向で左程理窟臭くもなく、多少新年の情趣にも通ふ處が先づ仕合せである。



## 浴みぬれば今肌涼し流れ川

夏の日川中で水を浴びたので涼しくなつたと云ふことだが、それを元良親王の歌の『佗びぬれば今はた同じ難波なる』の語路と合はせて、只だ此一點が全局の趣向となつて居る。全くお稻荷様の地口行燈と云ふ處だ。然し之を貞徳邊りの題をそつち除けにした句に比すれば、一歩進んで居ると云つても可からうか。

## 鹿の毛の筆さる時もれうし哉

是は鹿の毛で作つた筆と云ふことから、更に料紙と、鹿を狩る獵師とを懸け合はせたものらしい。此句に至つては、單に口合を弄したと云ふ外何等の詩的趣味のない處が、貞徳そつくりである。よく師を學んだものだ。

## 風の手に引かれ歩くや夕涼み

風のある方へくと夕涼みの足を運ばせる。それを風に手を引かれると云ひ做したのである。極めて俗的な擬人法だが。こんな句は蕉門中でも稀には見る所のもので、即ち涼みの興味が多少現はれて居る丈、此人としては先づ出來た方である。

七 立札

次ぎは高島玄札の句、是も貞徳門の江戸俳人五哲の中である。

守り給へ今年はやくし十一しん

歳首の詠らしいが、作者が俗に云ふ四十二の厄年に當つたので神の守護をお頼みすると云ふのだ。而して厄四十二辰と薬師十二神とを懸け合はせたのだが、洒落としても甚だ苦しい洒落である。

眠れごも扇は捨てぬ暑さ哉

聞き居れば叩くごもなき水鶏哉

矢の下に母の乳を飲む鹿子哉

此等の句は巧拙は兎もあれ、別に口合も駄洒落も云つて居ぬ處は一段の進歩である。此人は八十三の高齡を保つて元禄二年に歿したとあるから、或は蕉風の感化を晩年に受けたものかも知れない。

八 ト 養

次ぎは半井卜養の句、是も貞徳派で江戸五哲の一人。

木の母を誰が云ひそめて花の兄

梅と云ふ文字からの洒落で、花の眺めに一切關係のない處は儘に長頭丸の高點を得た句であらう。

軒に糸垂るゝはすだれ柳かな

柳を簾に見立て、尙枝垂れに聞かせて、其趣向の主眼は此一點にのみ在るのだから情けない。然し奥羽の人に讀ませたら、枝垂れが矢張すだれだから、此趣向の利き目も少し薄いであらう。

四十から鳥も惑はぬ山路哉

孔子の『四十にして惑はず』を四十雀に懸けたのだが、此鳥が山路を惑ふとか、惑はぬとか云ふことは事實上には無いことで、是も随分苦しい洒落である。

草取の空に息つく青田哉

山鳩の聲の眠さよ若葉頃

尙こんな句もあるが、是には一寸例の洒落の點を見出せない。或は前の玄札の句の如く蕉風の感化を受けたのかとも思つたが、此人の死は

延寶六年で、元祿よりも十年前だから、さうでもなささうだ。若し獨立的に遣つたものとするれば一層手柄なのである。

### 九忠知

貞徳門では前回に解いた、江戸五哲の外に七俳仙と云つて、野々口立圃を首らに當時大家と稱せられた者が數人あるが、今回はそれよりも此立圃の孫弟子の神野忠知の句を解いて見よう。此人は延寶四年に切腹して死んだとあるから、まだ蕉風の起る以前であるけれども、貞徳派として珍らしく其臭氣が少ない。尤も此人の句で世間から稱賛されて居たものには、

### 白炭や焼かぬ昔の雪の枝

で、爲めに白炭の忠知と仇名をつけられた程であるが、吾々から云へば此句は嫌やな點が多い。即ち句の意は、茶の湯をする時爐の炭へ添へる白い枝炭、此白炭を見れば、まだ炭として焼かれぬ以前に雪を帯びた樹の枝の事を思ひ出す。即ち昔の雪の枝に再び立ち返つた觀がある云ふのだ。是れは全くコジツケ的の洒落で、詩的趣味としては何等の價値もない。けれど例の題をそつち除けにしたものに比すれば、或る具體的の眺めを人に訴へて居る丈が、此儕輩の句としてはまだまだ好い方の部である。尤も當時世間の評判を取つたのは、却て右のコ

ジツケ的洒落が中つたので、吾々とは全反對なのがをかしい。

三四

### 茶の花は立てゝも煮ても手向哉

茶の木は花として立てゝも、又お茶當として煮ても共に佛の手向になる。と云つたので、其眺めた感よりも、此兩の作用が利くと云ふ理知的の口合が主眼となつて居るが、まだ題をそつち除けにしたと云ふ程でもないのが仕合である。

### 何の氣もつかぬに土手の堇哉

此句に至ると蕉門の『曠野集』にも採用されて居て、即ち本物の俳句

となつて居る。句の意は人の何等の氣のつかぬにも拘はらず、土手の上に堇の小さい花が咲いて居る、それが中々に床しく哀れに眺められると云ふのである。是れは當時流行の頭附に何の氣もと云ふのが出て、それで出来た句かも知れぬが、兎角情景共に先づ備はつて居る處を感じ心する。

### 元日や何に譬へんあさぼらけ

此句は其空の氣分と云ひ、自己の心持と云ひ、只モウ美しく目出たく又嬉しいと歌つたので、何等の理窟も洒落も口合もないのだ。延寶以前に於て是丈純粹な詩的趣味の句があるのは奇蹟の一つと云つて可か

句評及俳話

三五

らう。トコか真室の『これはくさばかり花の吉野山』の句と着想が似て居て、而して共に貞門系であるのも妙だ。

### 霜月やあるはなき身の影法師

是れは切腹する時の辭世で、此霜月は單に曆の月の名と計り見ず、其頃の空に霜を帯びつゝ照らして居る月の事をも暗に含んで居るものどしたい。即ち其月の下に僅に残つて居る、それは今亡き身となり行く影法師一つであると云ふのだ。如何にも死に臨んだ心細い状態がよく現はれて居る。

因に云ふが、此忠知の事蹟を種として柳亭種彦作の草双紙があつて

私は四五歳の時から、それを眼に親しんで居た。而して少し年を取つて後、此双紙は『娘金平昔繪双紙』と呼ぶことを知つた。又處々にある俳句も讀み覺えることになつた。それで晩年俳句を始めるに至つても、幼年に先入した忠知の句がイツも頭に往來したのである。加之子規が畢生の大著述たる季題分の俳句類纂に着手したのも實は此忠知の『元日や』の句が動機となつて居るのだ。それは或る時子規が私に向つて元日の句には古來少しも好いのがないと云つたので、私はそれなら是れはどうかと云つて此忠知の句を誦したら、子規も成程是れは先づ好い句だと云つた。ソコで熱心な彼の事だから、斯様に知らぬ句があつてはならぬと云ふので、季題の類纂をする必要を感じ、其夜直ちに筆

を取つて遂に大著述に着手したと、後に私へ話したことである。何しろコンな關係もあるし、私は此忠知の句に就ては特に今昔の感が多い。従つて今回解釋した數句の如きは、何れも暗記の儘を持出したのである。

### 十 貞室

貞徳門の所謂七俳仙中では安原貞室が蕉門に於ても可なり尊ばれて居たものか、七部集中の『阿羅野』に其句が四ツ許りも見えて居る。第一は例の

これはくごばかり花の吉野山

で巻頭を占めさせて居る位だ。句の意は、所謂一目千本と云ふ眺めは美しさと大きさが逆も言葉では云ひ盡くせぬ、只だこれはくごばかりオツたまげてしまふと云ふのである。成程是なら蕉門の好尚と一致したのも當然である。尤も穿つて言へば、花の好いと云ふことを吉野へ懸けたらしくも見えて、コ、が貞門としては重なる趣向であつたかも知れぬが、凡て句は作者の意の如何を問はず、成るべく好い方に好い方にと解くべきものであつて、私は常に選句上にも此考へを用ひて居る。蓋し『阿羅野』の選者も私と同様の考へなのであらう。而して

このよしの懸け言葉は左程耳立たぬから一層貞風の臭氣を感じぬのである。

四〇

### 我等形式が宿にも来るや今朝の春

我等形式とは我々共の身分と云つたやうな卑下した自稱である。そんな宿へも今朝の春は来た、誠に以て有り難く目出たいことだと云ふのである。此句も何等の理窟も口合も云つて居ない。只だ我等形式と云ふのが聊か蕉門の口氣でないと言はれ云はるゝ位のものである。

### 面白うさうしさばくる鶉繩哉

鶉遣ひが舟で鶉を遣ふ繩の數多が互ひに纏れもせずうまくさばけて行く、それを見て面白いと歎じたので、純粹の叙事叙感である。尤もさうしとは何であるか、僕はまだ調べて居ぬけれど、是れとて決して口合などではなからうと思ふ。尙此さうしに就ては御承知の方の教を受けたのである。

### いざのぼれ嵯峨の鮎喰ひに都鳥

「角田川にて」と前書があるから、例の鳥に對して名が都と呼ぶ處より、其都の嵯峨の名物の鮎を喰ひにのぼつて行くがよい、いざ〜と云つて戯れたのである。是れも都の關係を趣向にしたのを如何と云は



ば云へ、それが即興的の滑稽だから何等理窟臭い感じがない。他の三句と共に此句も「阿羅野」に入れられた譯も此邊にあるのであらう。此外貞室の句は數々あるが、それは多く臭氣紛々たる貞門風であるのを遺憾に思ふ。

### 十一季吟

北村季吟は芭蕉の師だと稱せられてゐるが、矢張貞門七俳仙中の一入である。此人の句の「阿羅野」に見えて居るのは僅かに一句で、

鳥籠の憂き目見つらん時鳥

前書で見れば實際に鳥籠に居たのを放して遣つた時の吟だと云つて居るから、全くの寫實で、それ丈貞門の臭氣はない。只だ平凡と云ふまである。それから、

一僕さほくくありく花見哉

此句も心ゆたかに忍び姿で花見をして居る實況がよく現はれて居る。尤も僕さほくくが懸けてはあれど、貞室の花のよしの山の同格で別に耳障りにならぬのである。

北面の見さむらひけん窓の梅

是れも見さむらひは御侍に懸けてあれど、必ずしもさう見ないでも可  
い。北面の侍は略して北面とも云ふから、それが見たであらうと敬ま  
つて云つたので、而して窓の梅を或る官女の美人などをほのめかした  
ものとすれば、可なり西行の昔物語りの戀味が歌はれた句ともなる  
のである。戀と云へば、

四四

### 夏瘦と答へてあごは涙かな

此句の如きは純粹の戀の句で、支那の詩の閨怨の翻譯らしい。即ち「臂  
臂金環寛一寸、過人猶道不相思」などの情味がよく現はれて居る。然  
し以上の句は其好いものを挙げたので、其他は矢張貞室の句の其他と

同一臭氣であることは勿論である。此季吟の子の湖春の句に就ては次  
回に紹介しよう。

### 十二湖春

北村湖春は季吟の子であつて、芭蕉翁よりは三年後れて歿して居る。  
それ丈時代の感化は此系の人にも及んで、貞門の臭氣を脱却して居る  
のみならず、其父の風さへも承け繼いで居ないやうである。

### 蝶 輕し頃は着る物一つ哉

春も段々と温くなつて己れが着るものも綿入一枚位となつて、身も心

も軽らかに覺えて來る、それをそこから飛ぶ蝶の眺めに寄せて歌つたのである。然して南華經の蝶と周との夢のことなども、どこかに此趣向の基く處となつて居るらしい。

四六

### 名の付かぬ處可愛ゆし山櫻

山櫻は一重櫻で多く山野に自生して居るものである。其のヒラ／＼として淡泊なる花の眺めは、他の櫻の普賢だの、揚貴妃だの、或は樺とか淺黄とか、様々の名をつけられて、其萼や色のコツテリしたものよりも、却てかはゆく思はるゝと云ふのである。聞きやうに依れば少し月並的の嫌味も無いではないが、山櫻其物を眼に浮べて、而して此句

を誦すれば、一種の無邪氣にして可憐な情致を感せしめる點もある。何しろ貞徳系としては大なる豹變であらう。

### 恥かしや蓮に見られて居る心

蓮は泥中に生ひながら斯く清く美しい花や葉を持つて居る。それに対すれば、己が人としての立場が逆も及ばぬことを自覺する。そこで何んだか彼の蓮が己をさげしみつゝ見て居るやうに思はれて、誠に恥しい感じがすると云つたのである。周茂叔の蓮は花の君子なるものと云つた事なども思ひ合はせた趣向らしい。多少理窟臭いと云へば云はれるが、「蓮に見られて居る心」と婉曲に叙した處に、中々詩的手段が

見えて居る。

名月や見つめても居ぬ夜一夜

名月名月と云つて待ちこがれて居たが、愈々此の清光を仰ぐことになつた、がさうなれば夜一夜それを見つめても居ず、或は飲み食ひもし談話もし、糸竹などにも興じて月をば餘所に置いて居ることもある、さても人間はをかしいものであると云つたのである。此句に至れば少し穿ちに涉つた點も見えて来る。後世の所謂月並家といふ輩は重もにこゝ等を覗つて、而してそれを一層俗化せしめて居るのである。

星一つ五位一聲の寒さ哉

此句は全く季節柄の叙景叙情に外ならぬ。只だ今日から見ればモウ平凡だと云ふ感がする丈である。

人我をかはやしと見ん雪の笠

又「かはゆし」を使つたが一種のあどけない口氣の上に詩的情味が見えて居る。而して是は常盤御前などの女性に代つて云つたものではなくて、やはり作者自身、即ち一丈夫たるもの、自叙であるとせねばならぬ。而して其一丈夫たるものが斯かる言をなす、ソコに詩味の津々

たるものが存じて居るのである。

五〇

### 行年よ京へごならば状一つ

太陽は東から出て西へ往くから、年も亦東から来て西へ往く感がする。そこで自分は東の江戸に居て西の京に知る人があるが、よい序だから文を遣りたい、ごうか途中でそれを届けて下さい、行年殿よ、と戯れて歌つたのである。如何にも軽く無造作に言ひ放した處に詩人の襟度が見える。此句の如きは此人として上乘のものである。

湖春の句は蕉門七部集中「曠野」に一句「炭俵」に五句も見えて居る。右の名月の句も其一つであるのだ。

### 十三 宗因

西山宗因は貞徳風のやゝ衰へ、芭蕉風の未だ起らざる際に崛起して、一時は中々全國の俳人を風靡して居たものらしい。それは今日でも此人の創めた談林風系統の俳人が多少存在するのを見ても解かる。而して此人の句も最初は貞徳門の松井重頼に學んだとあるから、それ丈同派の臭氣を帯びて居たが、漸次自家の風を立てたのである。けれども貞徳に比して、其言葉の上へのみ手段を弄すると云ふ弊習を脱したと云ふ丈で、其趣向に於ては矢張口合や洒落を主とする事を免れて居ない。而してそれは謠曲や其他の成語とか語呂とかを取るのが得意の

やうに見える。

四辻の六かしく霞む大路哉

四ツと六ツとを懸けたのが其眼目だが、さり迎霞の眺めも全く外に  
して居ないのがまだく可いのである。

籠に入れば座敷にあがる雲雀哉

揚げ雲雀と云ふから、それを籠に飼つた時は座敷へも揚がる  
と云つたので、これは前の句に比すれば、洒落の理窟臭い丈が劣つて居る。  
其眺めの上からは殆どゼロになつてしまつたと云つて可い。

馬草に添へて喰はるゝ轡蟲

單に秋の蟲が秣と共に喰はれたと云つたら、聊か哀れな詩趣にも聞え  
るのであるに、態々轡蟲と云ふから口合に落ちてしまつた。而してこ  
れが作者唯一の苦心の在る處であるから恐れ入る。

松に藤蛸樹に上るけしきあり

此句も多少理窟臭くないでもないが、其見立ての上が奇抜で、且つ思  
ひ切つた極端なる洒落であるから、誰れが讀んでも何々と一笑せざる  
を得ない。此點が即ち詩的趣味として一步を進めて居る處であらう。

阿陀蘭の文字が横たふ天津雁

此時代に横文字を假り來つたのだから誰も其斬新に驚いたことであらう。而して句の價値も先づ前の句に追隨するものと云つて可からうか。

萬民申すあつばれ御年候よ

年の新になつて萬民の御代を謳歌する趣を云つたのだが、下十二字は全く諸曲の語呂に倣らつたのである。而して此語呂が人に強く感じを與ふる丈それ丈或る臭氣の紛々たることを免れない。

里人の渡り候か橋の霜

是れも上十二字が謠曲的だが、前の句よりも態とらしく耳立つて聞えぬ。それは言葉の使ひ方がやゝ自然的になつて居るからであらう。芭蕉翁の「あなむざんやな兜の下の蟋蟀」なごど頗る相似て居る。

鴨の足は流れもあへぬ紅葉哉

水中に居る鴨の足の見立て、これは古人の和歌より取り來つて居ることは、骨牌取る娘さんでもよく解からう。

清水門や民の止まるごころてん

江戸時代の此門前には、ごころてん店などがあつたものと見える。そこで「詩經」否「大學」でよく知られて居る「邦畿千里惟民所止」の語呂を假りて來て洒落たのである。

世の中や蝶々ごまれかくもあれ

此句は前の句と反して優しくあごけない子供の唄を假りて居るが、それでよく人生を達觀した洒脱な襟懷が歌はれて居る。殊に言葉の扱ひも頗る自然的に聞えるやうだ。

螢火も百がものあり滑川

昔し青砥藤綱が此川で誤つて落した十文の錢を撈らせる爲めに五十文の炬火代を費したと云ふ故事から、其火を螢火に思ひ寄せて洒落れて見たので、百とは百文の事である。これは言葉の上でなく、意味の上の取合せであるが、其趣向は先づ川柳の領分と云ふ方であらう。

鶯やまん丸に出る聲の色

鶯の聲の色をまん丸と云つたのは、一寸よく形容されて居る。而して何等の細工をも加へてない處が、此人として上乘の句である。



菜の花や一もご咲きし松のもご

此句に至つては其眺めた儘を直叙されて居るのが有り難い。尤も一もご松のもごごに何か関係があるかも知れぬが、そこまで穿鑿せぬ方が善意に句を解する譯であらう。

十四 芭蕉

是から愈々松尾芭蕉の句を解くべき順序となつたが、從來俳聖とまで仰がれて居る此翁でも、最初から詩的趣味に適つた好い句のみを作つた譯ではない。即ち京都では北村季吟に師として事へ、江戸へ来て

は西山宗因にも先輩として交つた關係から、矢張其人々の句風を真似ることを免れなかつた。又天和の頃は其時代の新傾向とも云ふべき、字餘りで且拮据な調子の句も随分試みて居たのである。そこで是れからは先づ夫等の句を解いて後の正風調に對する異同を示すことにせう。

箸の先に花咲かせ鳧櫻海苔

海苔を箸の先へ挿んだからとて少しも花らしくは見えぬ。それを斯く云つたのは、單に櫻と云ふ名に因んだ口合であつて、實際の眺めとは何の關係も有つて居ない。是れは貞徳派の餘弊を襲つて居るものゝや

うだ。

六〇

糸櫻こや歸るさの足もつれ

こやは是れやで、此句も糸櫻の糸から足纏れと懸けて來たのである。花を見捨て歸るのが惜しいと云ふ心を纏れると云ふのは頗る無理な言であるのみならず、高き櫻の木に對して吾が足元の事を云ふのも何だか不穩な感がある。要するに作者の心は糸櫻の糸と足纏れの纏れとの懸合せが唯一の趣向であつて、他はどんなであらうがお構ひないのである。此句などは最もよく貞徳の神髓に達して居るやうだ。

うかれける人や初瀬の山櫻

大和の初瀬山の花見をして人が浮かれて居ると云ふことだけは分かつて居るが、それを斯かる語呂を假りて現はした、此一點を作者は非常な手柄と思つて居るのである。而して此語呂は百人一首でお馴染の源俊頼朝臣の歌である事は誰れでも分からう。此句は全く前回の談林調を模したものである。

内裏雛人形天皇の御宇こかや

人形は仁恭とか允恭とかの語呂を取つたので、矢張檀林調だが、雛人

形ぎやうの事ことだけに何なんだか無む邪じや氣きな子こ供どもらしい處ところがあつて先まづ助たすかる。

六二

### 愚按ぐあんずるに冥途めいとも斯しかくや秋あきの暮くれ

「愚按ぐあんずるに」宗因そういんの口氣こうきそつくりである。而しかして斯しかくしかつべらし  
く秋あきの暮くれの寂さびしみを述のべた點てんに多た少せう俳諧はいかい趣味しゆみを存ぞんして人ひとを笑わらはせる處ところ  
があるのだ。

### あら何なにごもなや昨日けふは過あまぎて鯁かぎご汁じゆ

冠かむりが八音はつおんだが讀よんで左程さほど長ながきを感かんせしめず、而しかして鯁かぎを喰くつて死しな  
ゝかつたのを誇こし示しする情態じやうたいもよく現あらはれて居ゐる。此等これらは大分たいぶん内容ないようの方ほうに

力ちからが入はいつて居ゐる句くだ。

### あなむざんやな兜たうの下の蟋蟀せつせつ

是これは「奥おくの細道ほとみち」にあるから正風せいふう後の作さくだが、前まへの句くと共に謠曲さうきよくの句  
調てうを弄もてあそんで居ゐる。翁おうも談林だんりんと交遊かういうの昔むかしを時々ときとき思おもひ出だしてこんないたづ  
らをされるのであらうか。此句このくは齋藤實盛さいとうさねもりの往事わうじを懷おもひ遣やつたので、  
謠曲さうきよくの文句もんく其儘そのまを用もちひて居ゐるが、前まへの句くよりも詩的趣味しきしゆみとしては一層そう  
勝まさつて居ゐる。然しかるに其後そのご翁おうが監督かんとくの下もとに選えらまれたと云いふ「猿蓑さるまの」には  
あなの二字にじを削けずつてあるのは如何いかのもの歟か。尤もつともむざんやな丈だけけでも  
意味いみは分わかるのであるから、成なるだけ五七五調ごしちごてうの正調せいてうを後人こうじんに守まもらせ

る爲めには斯く改めて傳ふるを安全だと思はれたものであらう。

六四

毳風を吹て暮秋歎ずるは誰が子ぞ

丁度二十音で、何だか漢詩の和譯とでも云ひさうで、兎に角拙劣な句である。

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉

是も二十音だが「前の句に比すれば調が拮据を免れて居て、其叙寫法も順序が立つて居る。従て其趣味も幾分か受け取れる處があるやうだ。

雪の鰻左勝水無月の鯉

歌合の判などの言葉を借りて、鰻鍋よりも鯉の洗ひの方が甘まいと云つたのであらうが、是は談林と「虚栗」との和へませと云ふ處であらう。

馬に寐ねて残夢月遠し茶の煙

是れは正風後の作だと云つてあるが、「あなむざんやな」の句と共に時門人を驚かす爲めに悪戯をされたものであらう。

狂句 風の身は竹齋に似たる哉

此狂句の二字に就ては以前から議論もあるやうだが、「冬の日」に入つて居る句だとすれば、私は句中の文字ではないと云ふ説に従ひたい、若し句中の文字であるのなら、「猿蓑」の「あなむざんやな」のあなよりも此狂句の二字が先づ以て削られねばならぬ筈である。或は「冬の日」の頃にまだ其注意がなかつたものか。

以上は芭蕉の正風以前の句を解いたが、是から愈々其正風の句を解くことにせう。此正風を唱へた最初の句としては、

古池や蛙飛び込む水の音

がよく擧げられて居る。然るに此句は翁としての傑作でないことは勿論だけれど、従來の貞徳風や、談林風や、又虚栗調などを脱却して、純粹の詩的趣味を穩健平明なる調子を以て歌ひ出したと云ふことの代表句とするには十分である。殊に七部集中始めて發句―連句でない一が載せられた「春の日」に於て翁の中では此句が最初に見えて居る處から、何人も此句に意を注ぐ譯もあらうだが、或る一輩の説の如く、此句に何か非常に深奥なる意味を有つて居ると云ふことは全く謬見である。即ち此「春の日」に載つた體裁を見ても、矢張他の人々の作の

中へ何等の區別もなく雜載されて居る事を以て、翁自身及び他の門人等に於ても當時此句に特殊の價値を置いて居なかつたことが知れる。従て此句の意味はどうかと云へば、矢張此文字の通りに讀んで分かる丈の事に過ぎないのである。即ち翁が深川の庵に住んで居る際或る日の寫生的出來事なので、而してそれが多少寂しい景と情とに涉つて居ると云ふまでの事であるのだ。

鶯 や 柳 の 後 藪 の 前

此句もアチコチとこんな處に鳴いて居ると云ふ丈だが、春の日和の麗かな氣分は十分に受取れる。

鶯 や 餅 に 糞 す る 縁 の 先

是れも鶯の句だが、前の句に比すれば區域が小さくなつて居て、出來事にも一つの可笑味を伴つて居る。

稻 妻 や 闇 の 方 行 く 五 位 の 聲

五位は五位鶯で、此句は多少闇の夜の物凄興趣を感じしめる。

春 雨 や 蜂 の 巢 傳 ふ 屋 根 の 漏 り

蜂の巢のやうな小さな物に雨漏りの雫がして居るのを見付けたのは、

如何にも繊細な着眼である。

七〇

落ちさまに水こぼしけり花椿

是れも椿一輪の落るのに眼をつけたのが細かい。而してよく活躍させて居る。

陽炎の我が肩に立つ紙子哉

此句に至つては細かいことも細かいが、頗る奇想で、濕つばい垢のついた紙子までが直ちに眼に入り来るやうだ。

荒海や佐渡に横たふ天の川

大景を叙して雄渾なものとなれば又こんな句がある。通例では横たはると云ふべきだが、それでは句調が悪く力も弱くなるから、斯く他動的に天の川を誰かが持つて来て横たへたやうに云つて居る。コ、等が翁の措辭にも老練な點である。而して敘寫に理想的を雜じへることも此句が模範を垂れて居る。

島々や千々に碎きて夏の海

海面に島の散らばつて居るのを千々に碎きてと云つたのには如何にも

叙寫が奇拔で、其眼界の廣く大きく、且つ活々として涼しい海面の景が手に取るやうに現はれて居る。

七二

### 五月雨を集めて早し最上川

長雨の下に河の流れの盛んな勢を見せる爲めに集めてと云つたのは、實に奇警な語で、千鈞の力があると云つて可い。且つ降り續いて居る雨の時間さへ併せて現はされて居る處がうまい。

### 暑き日を海に入れけり最上川

是れも同じ最上川だが、天上の炎日を此河流の力で運轉して居るが如く言ひ做した處に力がある。而して一暑一涼、其時刻の推移までをよく人に感せしめて居る。

### 八九間空で雨降る柳かな

柳の枝の風に吹き揚げられて雨を寄せつけぬ處を形容したのだが、此の措語などは實に放膽を極めて、而かも實景を人の眼前に躍出させて居る處が妙だ。

### 棧や命をからむ蔦葛

木曾の棧は昔蔦葛でからんであつたから、それを通行する旅人の危



ふむ心持を云つたのである。是れも奇拔は奇拔だが、多少理智に馳せて氣の利き過ぎたやうな點が、前々の句に比すれば卑しい感がある。尤も從來の俗俳連はコ、等を最も有難く拜んだものである。

七四

吹くたびに蝶の居直る柳哉

是れも見つけ處と言ひ廻しどが織巧と云は、織巧だが、矢張氣の利き過ぎた方で、俗俳連の視ふ的たることを免れぬ。

道端の木槿は馬に喰はれけり

此句に至つては人の戒めだとも解されて居て、それ丈俗俳連には大

受けの句であるのだが、私から云へば只だ見た儘の叙景であつて、それに多少の滑稽を含んで居るのみだと思ふ。

右く如く翁の正風後の句と雖も種々なのがあるが、今回は是れ丈にして置いて尙次回には一層變化した句を解かう。兎角翁の句は非常に多方面であるのだ。

是からは芭蕉の句に就て如何に其變化の多きかを吟味せう。此點に於ても翁は中々えらい。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

從來俳句には切字を入れねばならぬと云つて居たが、翁に於てこんな

名詞許りを列ねた句もある。而して之を讀む際に文字の上には見えて居ぬ助辭や動詞などがどこかに響て來る感がして、而して其意味もよく分かつて居るのが妙だ。即ち奈良の地は七重とも云ふべき結構で、式に應じた七堂の伽藍があつて、而して古來歌にも詠まれて有名な八重櫻が咲て居る、尊とい哉美しい哉と、歌つたのである。印度では本邦の八重と稱へる所を七重と云ふが例で、阿彌陀經にも「七重羅網七重行樹」などとある。因て翁も其佛寺の關係から印度の語例を用ひ、尙ほならなへど語呂を取り、又七重の七から七堂と連らね、更に七重より下の八重櫻へ縁語の關係を取つたのである。而して解剖すれば斯うだけれども、讀んでは左程細かく感せぬ處に一層の妙がある。

### 梅若菜鞠子の宿のころ、汁

此句の方はの、字が二つ加はつた丈に句の姿もや、優しくなつて居るが、大體の叙法は前の句と同じである。而して是れは翁の門人乙洲と云ふが東海道を経て江戸へ行くのを送つた時の句で、春の季節に於ける途中の景物を叙列して、夫々を眺めもし喰べもして嘸ぞ好い旅の氣晴しをすることであらうと云ふ意を言外に聞かせたのである。尙ほ前の句と此句との異點を擧ぐれば、前の句は前書なくても意味は十分に分かれど、此句は前書なしには、何の爲めに斯く叙したのか分らない。此點を劣ると云は、劣るとも云はるゝであらう。

蚤虱馬の尿する枕元

此れも句調は似て居るが。助辭や動詞の加はつて居る丈其姿も愈々優しくなつた。翁が或る佗びしい宿りをして、夜一夜此等の物に困められたと云ふ叙事叙情の句である。而して枕元と据ゑた爲めに前書はななくても可なり其場合も分かるのである。

梅柳さぞ若衆哉女哉

此句の如きは切字はあれど、それが二ツある點が普通と違つて居る。而して是れは正風を唱ふる以前の作である丈一種の耳立つた調子も聞

える。が切字疊用法の模範としては十分である。句の意は梅と柳を假りて人物を稱賛したもので、此頃文展でよく見る元祿の風俗畫などが眼前に出て來るやうだ。

初眞桑豎にや割らん輪にやせん

是れも前の句と叙法が似て居るが、正風以後の作丈に讀み易く分り易い。

花の雲鐘は上野か淺草か

叙法の似て居る句にはこんなものもある。

## 夕顔や秋は色々の瓢かな

此句は切字がやと哉と二ツの違ふ詞である丈何處かに調子が好くないが、然し「夕顔や」と先づ呼び出し、それが秋になつて形の色々の瓢になつた哩と感嘆したものとすれば、左程讀みにくいこともない。而してこんな二段切は餘り一氣に讀下さぬ方が可いのである。

## 起きよく我が友にせん寐る胡蝶

是れは三段切だが先づ句調は好い方である。翁の句の變化はまだまだ是れ丈に止まらぬから、尙次に於ても洩れた所を解くことにせう。

芭蕉翁の句の變化を知らうと思つて偶々翁の「野晒し紀行」を見たが、其中に載つて居る句の調子が如何にも今日の新傾向邊りのと似て居るのは今更ながら驚いた。此紀行は貞享元年に出来たので、「古池や」の句の出来た元禄三年よりは三箇年も前だから其筈ではあるが、一時の流行に突飛なものが出来ることは今も昔も變らぬと云ふことを染々と感じた。尤も昔のは今の如く木に竹を續いだやうな取合せや、讀んでも一寸分かり悪いやうなものは先づ少ない。コ、が昔と今との違ふ點であらう。因て再び正風以前へ立戻る嫌ひもあるが、今回は夫等の句を擧げて解釋することにした。

猿を聞く人捨子に秋の風如何に  
 三十日月なし千歳の杉を抱く霞  
 芋洗ふ女西行ならば歌詠まん  
 手に取らば消えん涙ぞ熱き秋の霜  
 御廟年を経て忍ぶは何を葱草  
 牡丹薬深く分け出る蜂の名残哉

此五句の下十二字は普通の七と五であれど、上の五の處が必ず七か八

になつて居る。即ち今日の新傾向の句によく見る處と同様である。然し此五句と雖もテニヲハは勿論動詞等も夫々に加はつて居るし、其意も全句一貫的で、複雑多方面でない丈に、調子こそ少し變だが、讀んで直き分かることは分かる。即ち

第一は、昔支那の詩人は巴東三峽に猿の聲を聞いてさへ涙を流したと云ふ、夫等の哀れを解する人達よ、此捨子の上に秋風吹き渡る處を見たら如何に哀れを感じるであらうか、我はモウ腸も切れくになつてしまつたと云つたので、即ち翁が途中で偶々三歳許りの捨子が居るのを見て物を惠んだ時の作である。言葉は妙にカドくしいが情は頗る深い。

第二は、大陰曆では三十日に月が出ない。それで今三十日の夜だから月はない、唯だ千歳經る杉を抱くかのやうに吹き募る嵐の音を聞き許りだと云つたので、是は伊勢の大廟に参詣した夜の趣を歌つたものである。序だから云ふが、コ、の紀行中に自己の事を叙して、

腰間に鐵を帯びず、襟に一囊をかけて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり、俗に似て髪なし、我僧にあらすと雖も髪なきものは浮屠の屬にたくへて神前に入ることを許さず、

とある。兩部盛んの時代でも伊勢大廟のみは、純粹の神でおはしまして、佛徒の近づくことを禁せられて居たから、そこで翁の坊主頭では参拜が出来なかつたものと見える。それを自ら嘲る如く、又聊か恨め

しげに書いた處に、一種の滑稽が見えて居る。

第三は、芋洗ふ女がそこに居る、西行法師ならば定めて歌を詠んだであらうと云つたので、取合せが芋と女と西行であるから一寸可笑しい。而して其西行に代つて我はそれを發句に入れたと云ふ意も言外にほのめいて居る。

第四は、手に取つたなら直きに消えてしまふだらう、我が涙が熱く湧いて居るから、それが此秋の霜に降りかゝつては、と云ふのである。是は故郷へ歸つた時、亡くなつた母の白髪を兄なる人より示されて悲しみの餘りに作られたものである。秋の霜は云ふまでもなく白髪を指したので、今日の現實家から云へば、言葉を繰つり過ぎて真情に乏し

いなごとの批難も起ころうが、それは我が國民性に屬する風雅の詩味を解せぬ、否忘却した、バタ臭い考へに過ぎぬのである。

第五は、御廟は年を経て居る、偶々偲ばしい心が起つたが、これは何の爲めであらうか、軒端に生ふる葱草を見るにつけても、と云たので、即ち吉野山で後醍醐天皇の御廟に詣でた時の作である。固より自分には偲びつゝある事柄を知つては居れど、それを斯く他へかけて歌ふ處に、感慨の情を愈々深めるのである。此等の歌も現實家には解し得ぬ點であらう。

第六は、牡丹の花の薬が深い、そこに久しく親んで居たのだが、モウ其薬を分け出ることになつた、それは蜂で、蜂が如何にも名殘惜しくして居ると云ふのである。是は翁が桐葉と云ふ人の許に二度も逗留して居て、愈々東歸すると云ふ時の挨拶として詠んだものである。時節の景物を以て我が意を表はした處は即ち象徴的とか云つても可いのであらう。また此外にも數々變調があるが、其中でも、

海暮れて、鴨の聲、仄かに白し

と五五七がある。

躑躅活けて、其陰に、干鱗裂く女

と六五八もある。而かも其意味丈はよく分かつて居るからモウ解釋す

るにも及ぶまい。

八八

芭蕉は從來の俳諧即ち滑稽のみに限られて居た俳句を、汎き詩的趣味を歌ふことに改めたのであるとは云へ、滑稽も亦詩的趣味の一部分であるからには、此等の句も全く作つて居ないのではない。そこで今回はそれを解くことにせう。門人嵐雪が自書の讚を乞ひたるに對しては、

朝顔は下手のかくさへ哀れなり

随分ひやかして居るではないか、又嵐雪が正月小袖を仕立て、贈り越したるに對しては、

誰やらが姿に似たり今朝の春

「私の姿が定めしお前に似て居らう」と云ふことををかくしくほのめかしたのだが、そこに其厚意を嬉しく思ふと云ふ意も見えて居る。それから許六も同じく自書を翁に見せたが其讚には、

勝角力いつも上手に米の飯

此方は嵐雪の畫よりもうまかつたと見えて、句の意は、常に米の飯を澤山に喰つて居るからそこで上手にもなると譽めたのだ。即ち「上手に」の下に「其譯は」とか、「米の飯」の下に「喰つて居るから」とか

句評及俳話

八九



云ふやうな語が省略されて居るのである。此許六は彦根の藩士だから米の飯と戯むれた譯もあるので、即ち「祿を取つて喰ふことに困まらぬからそれでうまい」と云ふ意をほのめかしたのである。

九〇

### 東路の毛牒耻かし床涼み

是れは上方へ登つて行つて同地の俳人仲間始めて逢つた時の句で、「イヤむくつけき東夷が參つて候」と云つたのである。

### 尙見たし花に明け行く神の顔

葛城の神は醜い顔をして居ると傳へられて居るので、それが美しい花に對しては更に如何に醜く、且つ神自身にも耻ぢられることであらう、それが一番見たいものだと言つたのである。随分神様へは不敬な言だが、俳趣味の上には神も佛もない。

### 留守と云ふ小僧嬲らん山櫻

山櫻を見る傍に或る寺の僧を尋ねたが、偶々留守であつたので、其取次した小僧に向つて何かからかつて遣らうと云つたのである。是れは随分意地の悪い滑稽だ。

聲よくば歌はんものを櫻散る

顔に似ぬ發句も出でよ初櫻

二句とも自分の老人たるを卑下したやうな言葉を用ひ、而してそれにも拘はらず美しい櫻に對するのだと云ふ處に滑稽がある。

能なしの睡むたし我を行々子  
朝顔に我はめし喰ふ男かな  
座頭かこ人に見られて月見哉  
月花このさばりけらし年の暮

此等は皆自己を嘲りつゝをかしく興じたのである。第一は眠らうとする我を行々子が警むると云ふのだ。第二は酒でも飲むべき處をめし喰ふとは如何にも野暮だと云ふのだ。第三は頭を剃つて衰へた老の眼はこんな業體の者かとも見らるゝと云ふので、是れは事實にあつたのだらう。第四は一年中無用の遊びや吟詠をして世の中に厄介者となつて居る哩と云つたのだ。

人に家を買はせて我は年忘れ

是れは門人乙洲の新宅に寓居して春を待ちつゝある時の作で、「何たる狡猾ぞや」と自ら笑つたのである。

米吳る、友を今宵月の客

是れは「此座の上客はあなた様」だと戯むれたのである。

月見する座に美しき顔もなし

「どうせ俳句をうなる仲間駄目だ、月の前へ出せる御面相はない」と云ふのだ。

寺に寝て眞顔なる月見哉

「佛の前丈は流石に澄まして居る、コ、な横着者奴が」と云ふのであ

る。何たる洒脱であらうか。無闇に眞面目くと主張する今日の人々にも少しは此邊の消息を知らせたいものである。

隠さぬぞ宿は菜汁に唐辛

秋の色糠味噌壺もなかりけり

我が宿は蚊の小ささを馳走哉

自己が佗びた生涯を歎いたやうな言をして、實は裏面に呵々と笑つて居るのだ。

笠もなき我を時雨る、かコハ何んこ

初雪や幸ひ庵に罷在る

「コハ何んど」罷在る」で稽滑になつて居る。

めしあふぐか、が馳走や夕涼み

「かゝが馳走」でをかしい。

夕顔に見ざるゝや身はうかりひよん

「うかりひよん」は思ひ切つた言葉で、或は夕顔は美人の顔かも知れぬ。其見とれて恍惚となつた翁の顔も私は見たくなつて来る。

一ツ家に遊女も寝たり萩さ月

是れは旅宿での出来事で、翁の句中では色ッばい滑稽である。

以下は芭蕉の句の變化多きことを吟味せうと思ふのだが、前に挙げた「一ツ家に遊女も寝たり」の句の如きは滑稽中に多少戀味を含んで居るとも云へば云はれる。そこで此の外にも戀愛に渉る句を求めて見るに、此方面には翁の作が極めて乏しい。先づ、

紅梅や見ぬ戀つくる玉簾

是れは玉簾垂れた或る住居があつて庭に紅梅が咲いて居る、そこで此

の簾の内には如何なる優しく美しい女性が住んで居ようか、見ぬながらモウ其人が戀しい、即ち見ぬ戀を此の情景に對して思はず作つたと云ふのである。源氏物語の紅梅の卷の案察使大納言の姫の事などが直き連想に入つて來るやうだ。

### 行末は誰が肌觸れん紅の花

紅粉は人の唇や頬にもさすから、そこで此花の行末を想ひ遣つて斯く云つたのだが、尙ほ裏面には或る幼なくて美しい女子の身の上の事にも思ひ寄せた處があるらしい。是れは同じ源氏物語ではあれど、末摘花の女王の象の鼻へ持つて行く連想丈しないがよいのである。

### 語られぬ湯殿に濡らす袂哉

是れも言葉丈では戀らしい句だが、最近小泉迂外氏は一種の想定をして、翁には常に癩病に困んで居たので偶々湯殿山へ參詣して其平癒を祈る心を述べたものだらうと云はれて居る。さうだとすると戀どころか反對に色消しの句である。又是には季がないのも一寸珍らしい句である。尙ほ今一句

### かちならば杖突坂を落馬哉

途中の即事即興で、坂の名の關係もあるのだが矢張無季である。而し

て結局駄洒落に落ちて居るやうだ。

### お子良子の一もご床し梅の花

お子良子とは伊勢の神に仕へる少女の稱で、參詣の際其居場所に咲いて居た梅の花を詠じたものだが、一面には多少戀味もあると云はゞ云へよう。翁の句で此の外に戀愛的のものご云つては一寸見えない。要するに右等も只だほのめかしたと云ふ位で何等の執着もない。其他人情に關して歌つて居るものでは、

### 故郷や臍の緒に泣く歳の暮

久し振りに伊賀の故郷へ歸り、亡き母の事を思ひ、己れを産みましたる慈恩に負き空しく放浪して居たことを悔ひ悲んだのである。臍の緒は昔は産まれた時切り取つて、産髪と共に保存して置くもの故、翁もそれへ懸けて今昔の感を述べたのである。詩經の「哀々父母、生我劬勞」とある。蓼莪の詩などにも思ひ合はされる。而して此の如き倫理的の談でありながらそれが詩的趣味と衝突して俗味に落ちない處に敬服する。若し月並流に解かせたらこれ丈理窟臭くなるかも知れぬのである。

### 家は皆杖に白髪の墓參り

是れも郷里へ歸り偶々益會に出合つて其兄と共に墓參りをした時の作  
であつて、即ち一家いづれも杖を突いたり白髪を生やして居たりして  
モウ老人になつてしまつたと云ふのである。而して言外に兄弟同士の  
情愛なども温く溢れて居るのである。

墳も動け我が泣く聲は秋の風

是れは一笑と云ふ友人の追善の句だと云つてあるが、趣味を帯びつゝ  
其友情をも切實に叙されて居る處が妙だ。今我が泣く聲は秋風にまじ  
りて淋しく又勁烈であるが爲めに墳も動くであらう、サア動いて下さ  
いと云つたので、即ち此心がキツと墳の下にも徹するに相違ないと云

ふ意を婉曲に見せて居る。此句は句調丈でも中々緊張した作である。

亡き人の小袖も今や土用干

此の句は門人の去來の妹の千子と云ふのが死んだ時に申し送つたと云  
つてある。少女丈に小袖と云ふ處に一入餘情が見える。又今日の所謂  
元祿模様などが閃いて居る聯想も起つて來るのである。

芭蕉の句の釋解も思はず長く續いたから少し許解いて止める積りで  
ある。

雪の日や兎の皮の髭つくれ

これは「山中に子供と遊びて」と云ふ前書があるが、句の意味は私に於ては十分に解し得ない。先づ文字通りで云へば、雪の日で雪がちらつく、偶々兎の皮が干してでもあつて、其上に雪の附くのが恰も毛が生えたやうに見える。夫を興じて命令的に歌つたものかと思へるが、それなら「毛をつくれ」と云ふべきで、髭では些つと違ふ。又子供と遊ぶと云ふ事には何等關係がないこととなる。そこで今度は此の前書を主として解くと、これは子供などのよくする雪で物の形を造る場合なので、今偶々兎の形が出来たがまだ口髭が出来ない、何かで造らうぢやないか、子供よ」と云つたのかも知れぬ。けれどもそれでは皮と云ふ字が全く無用になるから、矢張穩な解でない。或は又此の兎を生きて

居るのだとして、それへ雪の降りかゝるのを其髭が造られると見做したとも云はれうが、それでは愈々皮の字が邪魔になつて来る。斯様に考へると私には一解をも得られない。「左傳」に「皮の存せざるに毛將た何くにかつかん」とあるが、此句はなまじつか皮の存して居る爲めに髭の持つて行き處に困まるのである。因て此の上は諸君達の教へを乞ふ外はないと思ふ。

いざ子供走り歩かん玉霰

此の句の如きは同じ子供との關係だが、サラ／＼と云ひ現はされて居て何等の疑點もない。而して翁の洒脱な態度や子供に對する愛情まで



一〇六  
が句の上うへに活躍くわつやくして居る。私も一番其尻はんそのしりへ附ついて駈かけ出しただいやうな  
氣きがするのである。

### 子供等よ晝顔咲きぬ瓜剥かん

これも前まへのと同じおなく分わかりよくて其その情味じやうみも中々なか深い。晝顔ひるがほ咲きぬしで  
日中にちちゆうの暑あつさも周圍しゆうみの景色けしきも十分に現あらはれて居て、尙なほ言外げんがわいに丸々まるくと太ふと  
つた裸子はだかこの居かるのは勿論もちろん、翁おうも或あるひは禪ぜん一つで旅たびに瘦やせさらばうた躰からだ  
を横よこたへて御座ござるかとも想おもはれる。

### 不性さや昇き起されて春の雨

此この句くとなるぜんと前二句くの活潑くわつぱつなるに反はんして懶惰らんだ極きはまる態度たいどが叙じよされて  
居かる。或あるひは病氣びやうきされたのか、否いな二日ふた酔よひ位くらの場合ばあひであらう。

### 飲みあけて花活にせん二升樽

此この句くは翁おうの大酒たいしゆを證明じやうめいして居かる。然しかし「花活はなにせん」とは矢張やはら翁おうの情  
懷くわいだ。

### 夕顔や酔て顔出す窓の孔

夏なつとなつては酒興しゆきやうも勃發ぼつぱつ。何なんだか酒臭さけくさい噫あびまでを聞きくやうだ。

川中の根本によころぶ涼み哉

「よころぶ」とは横にころがることらしい。水へドブんと落ちない御用心。

一つ脱いで後に負ひぬ衣更

氣軽るな身軽るなこと哉。頭陀袋中の杜子美や西行も呵々一笑して居ることであらう。

古沓や花の旅出の拾ひ履き

随分するい事もせらるゝ。草鞋錢位は門人共から出したのがある筈だに。

行秋や身に引き纏ふ三布團

此句へ來ると大分塞いでしまはれたやうだ。やがて夢の駈け廻る枯野へ近づいた時かも知れぬ。何しろ自由自在多方面で句に變化の極りないのが此翁の翁たる所であるのだ。

以上で芭蕉の句の講義は終つたが、此翁が大阪の花屋で臨終の際、門人共が翁にはまだ辭世の句を吐かれぬのは如何と窃かに云ひ合つて居るのを翁が聞いて、余は一生涯に作つた句の一句として辭世ならざる

ものはない、今更辭世と云つて作るには及ばぬと云はれた。此言は宗教の方面から解すれば、人生の無常を悟つた觀念から出たものだと云ふのであらうが、又文學方面から解すれば、一句一句皆真摯の態度を以て真面目に作つて居ると云ふ事にもなる。而して俳句上の談とすれば、此解が寧ろ當るやうに思はれる。そこで翁は一生涯真摯の態度を以て真面目に句作せられたとして、夫等の俳句は如何なるものかと吟味すれば、私が數回續いて講義した如きものである。して見れば、即ち超越的に、放膽的に、洒脫的に、諧謔的に、天然と人事とを諷詠して、而して其の總てが翁に於ては真摯の態度を以て真面目に句作せられたのである。それから推すと、翁以後の俳人、乃至今日の吾々と雖

も、即ち超越的に、放膽的に、洒脫的に、諧謔的に、天然と人事とを諷詠したものは、矢張真摯の態度を以て真面目に句作したと云ひ得るのである。何も個性とか、現實とか生に觸れたとかどうとか主張せずとも、真面目に句作したものはやはり真面目の作品である。他の言で云へば即ち一句一句辭世を詠んで居るのだ。要するに吾人が天然と人事に對して一つの趣味を感じ其感じたのが眞實であるならば、それを歌ふのは總てが真摯の態度であつて、其句は残らず真面目の産物なのである。超越的、放膽的、洒脫的、諧謔的、夫等に吾人が眞實の感をもつたのなら、何れの態度に出たとしても總てが真摯の態度に外ならぬのである。他の例で云へば、上戸が酒を飲んで旨いと叫ぶのも、下

戸が餅を喰つて旨いと叫ぶのも、何れも其味を眞實に感ずるからで、其態度は皆眞摯なのである。然るに一方から見ると一方の叫びは嘘の様に思はれる。是れは互に一方の味を知らぬからである。然るに今日の俳人其他文藝家の多の人々に於ては、他の人が新しい舶來的の態度で著作をせぬのを見れば、モウ總てを不眞面目な、空疎な虚偽なものだと罵倒する。是れは恰も上戸の下戸を罵り下戸の上戸を嘲ると同じ譯である。尙ほ其甚き者に至りては、己れ獨が宇宙大自然の眞趣味に達したと呼號し、或は己れ獨が人間の大自覺を爲し、古今人生の深奥にまで徹底したと主張して居る。けれども此結論を得るには前提を要し、前提には事實を示さねばならぬが、それが一寸見當りさうでない。

い。事實がなければ、銘々云ひ勝ちで「お山の大将おれ一人」と何の擇ぶ所もないのである。之を要するに人心は面の如し、人の趣味は十人十色、各々眞實に味あるものを味ふて、吾々俳人に於ても、それを俳句として歌へば可いのである。而して其の總てが眞摯の態度であつて、眞面目の作品なのだ。即ち又辭世なのだ。然しこゝに一つ取除がある。それは吾々が運坐の席などに於て、モウべ切時間が來ると云ふので直ちに筆を執つて書きつける句なぞもあるが、是は申さば強制的のものだから、自己眞面目の作品だとは云はれまい。其他坐中の傾向を窺つて多數點を得る爲めや、或は選者に宛て込んで口眞似をする句なぞの如きも、眞面目の作とは云はれぬのである。况や賞品を博取する

事のみが目的で句作する者に至つては、真面目も何もあつたものぢやない。然し初心者が段々と俳句趣味に到達する爲めや、句作の修練をする爲めとしては、夫等も全く裨益のないこともないから、多少は此の輩をも寛假して可いのである。

### 十五 其角

芭蕉の句に「兩の手に桃と櫻や草の餅」と云ふがあつて、これは門人に榎本其角と服部嵐雪の二人があることを誇つたものである。して見れば此二人は翁が左右の腕ともなつて居たもので、殊に其角の如きは同門中では學問のあつた方らしく、それは其俳句にも多く現はれて

居る。そんな事から當時の或る人々からは翁よりも其角の方がえらいとまで云はれて居た事もあるさうだ。兎角翁の句の次には其角の句を解くのが順序も好いから、今回はそれを解くこととする。尤も此人の癖は態とむづかしくひねくつたやうな句を作るのであつて、就中翁が正風を起こす前後に一寸弄んだ虚栗調の如きも、其角が主として賛襄したものでらしく、即ち虚栗集の編者も此人である。序ながら云ふが、此集の序文中に今日吾々が——宗匠達の使ふ發句と云ふ文字の外に——多く使ふ「俳句」と云ふ文字が使はれて居る。聞けば俳句と云ふ文字はそれが始まりらしい。して見れば此文字は虚栗集に種子を卸して而して二百年後子規の「日本」紙上で發生し普及したものと云つて可

いのだ。餘談はこれ丈にして愈々其角の句を解けば、

### 鶴さもあれ顔淵生きて千々の春

これは虚栗集中始めて見えた其角の句で、前書に天和三年試筆としてある。即ち元祿を距ること五年前で、當時の新傾向と云つても可い句である。句の意は、鶴は千年と云つて、よく目出たい引き事になつて居るが、それはそれで置いてまだく目出度いものがある。孔子の門弟の顔淵は今も生きて居て、幾千年の春に逢つて居るぢやないかと云ふのだ。此顔淵は實際は三十二歳で亡くなつたのであれど、亞聖とも云はるゝ勝れた人で、其精神は永く活きくとして社會に傳へられて

居ることを、今も生きて居ると云ひ做したのである。つまり一ツの理想的道德談に過ぎない。而してこゝ等が例の學問があるとも云はれた點であらうが、今日から見れば、否其後の正風から云つても頗る詩的趣味の乏しい句で、其調子も少々變である。而して顔淵の事なども天和頃はまだ珍しい着想なのであらうが、今日ではモウ陳腐極まる談となつて居る。

### 寒食や竈下に猫の目を怪しむ

寒食の日には物を煮ぬから竈も捨てられて居る。そこで猫が灰のほどぼりでも慕つたのか其下へ這入り込んで居たのを、目の光りがするか

ら「オヤ」と云つて人に怪まれたと云ふのである。これは前の句よりはやゝ詩的趣味であるやうだが、叙述が餘りに遠廻しで「目を怪しむ」と云ふのも虚栗風の一寸變な句調である。

彫<sup>リ</sup>笛<sup>ヲ</sup>縫<sup>ヒ</sup>蓑<sup>ヲ</sup>花に晴せん浮世哉

此句は樵に代ると云ふ前書があるから其代作の心だ。そこで樵夫のことであるから、花の時分だと云つて別に花見の支度もない。只だ手細工に笛でも彫り蓑でも縫つて責めては此花に對して我が晴れの思出をせうと云ふのだ。而して樵夫が笛を吹くと云ふ事は日本よりも支那的で、殊に此の如く字を返らせて書いたり讀ませたりする處が駄洒落と

云つても甚だしい。恰も漢和、和漢を一句で寄せ鍋したと云ふ處だ。

うきよ木を麓に咲きぬ山櫻

うきよ木と云ふ、こんな名の木があるか無いか私は知らぬが、兎角こゝでは人の浮世のさまざまであるのを雜木林などに似て居るとして斯く云つたものらしい。而してこんなうきよ木を麓に置いて山櫻のみは超然として氣高く美しい花を咲かして居るぢやないかと云ふのだ。つまり山櫻の精神をうまく現はさうとした手段ではあれど、うきよ木なぞと云ふは如何にも窮して居て、且つ總ての着想が理窟つばい。此句の如きは貞徳時代の趣向と何等の變りもないのである。

## 我が句人知らず我を啼く者は時鳥

數へて二十一字とは随分長い句だ。此等が當時の新傾向中でも極端なものであらう。句の意は我が句の眞味は人が知つて呉れない、只だそれを知つて、今日の言葉で云ふ共鳴して呉れる者は、時鳥のみである、即ち時鳥が我が句の知己であると云ふのだ。而して一面からは、時鳥の聲の眞味も只だ我が句に於てのみ歌つて居ると云ふ誇りが見える。此句中には論語の孔子の語をそれとなく取つて居るから、これも當時は威張れた一つであらう。つまり此句などは語法や句法を態とひねつてそれで興味を買はうとし、肝心の内容たる趣味に至つては左程注意を拂

はなかつた様子が見える。

以上は虚栗集にある其角の句の極端なものを解いたのであるから、

以下は其後の變化に就て解くこととせう。

其角の句に就ては既に「虚栗」に見えたものを解いて彼れが當初の傾向を吟味したのであるが、以下は芭蕉の句風の正に歸したると共に、彼れが句風も如何に變化して居るかを知らる爲めに、元祿七部集の「曠野」に見えたものを解くこととする。

## 雪の日や船頭殿の顔の色

是れは「大津にて」と前書があつて近江の湖水を船で渡らうとする場



合あひの作さくらしい。折をり節しゆき雪ゆきが降ふつて居ゐて殊ことに打うちち濶ひろけた湖こ面めんに對たいしたから  
 中なか々くさび寒さむい、今いま乗のりつた船ふねの船頭せんとうを見みれば彼かれも矢は張はり寒さむい色いろをして居ゐると  
 云いつたのだ。即すなはち風かぜも吹ふき添そひて所い謂ゆるさゝ波なみも白しろ波なみを起おこして居ゐる景けしき色いろ  
 が眼めに入いるし、船頭せんとうも煩わづか冠かむりなごしてガタ／＼と慄ふるへて居ゐるさまが想さう  
 像ぞうされる。尙なほ一いっつ穿うがつて云いへば、顔かほの色いろとは眞ま赤あかな色いろで、濁にごり酒さけで  
 も引ひつかけて存ぞん外ぐわい寒さむさによめげす威い勢せいよく遣やつて居ゐると云いふ方ほうかも知しれ  
 ぬ。或あるは又また顔かほの色いろとは不ふ平へいらしい色いろで、こんな雪せつ中ちゆうに船ふねを出だすのは面めん  
 倒たうだどつぶやきつゝあるのだとも思おもはれる。而しかして此これ等らは讀よむ人ひと々の  
 好よいと思おもふ方ほうに解かいして置おいて可よいのである。それから「船頭殿せんとうどのの顔かほの色いろ」  
 と殿どの付づけに云いつたのは暗あんに謠さう曲きよくの面おも影かげを匂におはせたので、そこにも一いっつ  
 の興きやう味みを生しやうじて、多た少せう滑こつ稽けい的てきにも聞きえる。兎う角かく前ぜん回わいの「虚み栗な」の句くと  
 比くらべては大たい變へんな相さう違ちがひがあるぢやないか。

松飾り伊勢が家買ふ人は誰れ

新しん年ねんの松まつ飾かざりをした家いえの中なかに偶たま々く「賣う家け」と札ふだを貼はつたものでもあつた  
 ので、それを昔むかしの伊い勢せの御み息すこ所ころの家いえと見み做なして、其その買かひ手ては誰たれであ  
 らうかと云いつたのである。而しかして時ときはめでたい新しん年ねんであれど住すみ伎わび  
 て家いえを賣うらねばならぬ人ひともある、又またそれを買かつて心こゝろ樂たのしく住すむ人もあ  
 らう、扱さも世よはさま／＼であると感じたのだ。伊い勢せの御み息すこ所ころと云いふは  
 誰たれも知しる和わ歌かの名めい人じんで、殊ことに貴たき方かたの寵ちゆう愛あひも受うけて居ゐたが、晚ばん年ねんに

零落して家まで賣り拂ふことになつて、其時詠じた哀れな歌もある。然しそれを其角時代の賣家へ持つて来た處が、例の學力を見せたのだが、又此の故事に依つて普通の家も何だが奥床しくなりて一層其哀れを増すのである。従つてこれも句作上の一つの好手段であるのだに、今日の俳人は段々と歴史の事などを忘れてしまふから口惜しい。嗚呼何んでもかんでも現實かネ。

すびつさへ凄きに夏の炭俵

是れは「庵の留守に」と前書があるから己れが旅に出立つ際に書き残して人に與へたとか、壁か門邊へ貼つて置くとかした句であらう。佗

び人の住居である上に、留守となれば愈々取り亂して居るから、訪ひ来る人は如何に凄く感ずることであらうかと云つたのである。而して偶々使ひ残しの炭俵でもあつたので、それを清少納言の「枕の双紙」の凄まじきものゝ中に「火おこさぬ炭櫃」とあるのに取り合はせて、炭櫃さへさうだのに、夏の明き家に轉がつて居る炭俵は尙更凄ごからうと可笑しく云つたのである。尤も此の句中には留守と云ふ事が些しも云つてないが、それは前書にあるから態と重複させぬのである。此の如く双方相待つて一つの場合を現はすと云ふ手段は初心者の前書附きの句を作る時に心得て置くべき要訣である。而して前書の爲めに拘束を受ける弊も此の手段に依つて大に救はるゝことになるのだ。

稻妻や昨日は東今日は西

此の句も「曠野」にあるから正風と認められたものであらうが、單に稻妻を眺めたと云ふよりも、或る世事の推移とか人情の輕薄とかを歌つたものだと解せられ易い。これが從來俗人間に専ら喧傳せられて居る譯である。然し好意的に解すれば、初秋の暮れ方に眺めつゝあればビカリノと稻妻がする、それが昨日の空と今日の空と方角が違つて居るが、兎角涼しく心地よい眺めであるといふことになる。「曠野」に入つたのも恐らく斯う解したからではあるまいか。要するに理智的に嫌ひある趣向や修辭はよく慎まないと飛んだ間違ひが起るのである。

芭蕉の「道端の木槿は馬に喰はれけり」も此の類だが、前書があるからヤツと助かつて居る。

以下は其角の句の「猿蓑」に見えたものを解かう。此の「猿蓑」は蕉門中で殊に高雅な趣味に達して居た去來凡兆兩人の手で編纂し、翁も十分に監査を加へられたと云ふ撰集だから、それ丈其角の句にも好いのが擧がつて居る譯である。

此木戸や鎖のさゝれて冬の月

鎖は意味の上から錠前の錠と訓ましたものらしい。此木戸とは眼前に指示した言葉で、又何となく大きく嚴めしい様子が現はれて居る。従

つて軍物語によくある。岩とか陣屋とかの大木戸を云つたので、それが今や錠前が堅くさゝれて居て、其上には冬の月が寒い影を浴びせて居ると云ふのだ。何如にも間然寂然として人馬の聲も聞こえず、焚き残された篝の火影位が僅かに構内にちらくとして居ると云ふ深夜の景が現はれて居る。而してたい寂びしみのみでなく一令の下には千百の兵馬が突出すべき準備のあることも想像されて、陰中に陽あり、沈静の底に活動の氣の潜んで居る趣までを感せしめる。要するに「此木戸」と上に置いたのがうまい手段で、頗る精神の徹底して且つ餘情に富んだ句である。

寝心や炬燵蒲團のさめぬ内

今まで炬燵に懸けてあつた蒲團を其儘床の方へ移したとか、或は炬燵とは「アンカ」の事で、それを入れて居たのを、逆上するから外へ出したとかの場合らしい。而して其蒲團の温たまりのさめぬ中へ足踏み伸ばして寝る心持は如何にも好い、即ち寝心が何とも云へぬ味だと云つたのである。此の句などは一つ罷り違ふと俗味に落ちるのだが、言ひ廻しが放膽的で、洒々脱々たる一種の氣象を現はして居るから些つとも厭味を感せない。

## 六尺の力おごしや五月雨

此の句は前書があつて「七十餘の老醫みまかりけるに、弟子こぞりて泣くまゝ、予に悼みの句乞ひける、その老醫いまそかりし時まさらに見知れる人にあらざりければ、哀れにも思ひよらずして、古來稀れる年にごそといへど、とかく許さゞりければ」とあるから、エ、面倒臭いと云ふ心が自然と語氣に現はれて居る處が可笑しい。六尺とは駕舁く男の稱で、昔の醫者は少し流行ると直き容體振つて駕でなければ病家へ行かなかつたもので、今の醫者の内の抱へ車夫が丁度昔では六尺なのだ。そこで主人公が亡くなつた上は、駕の用もないから隙で困

まらう、或はお拂ひ箱にもなつたらう、兎角六尺殿のみがガツカリして力落しをして居ることであらう、此五月雨の鬱陶しきにつけてお察し申すと云つたのである。即ち七十の老人のお目出度い往生に對しては誰れとて悲しむ者もなからう、況して交際せなかつた我に於ては何の感じもないから、強ひて追悼の句をお求めなら、是れ丈で御免蒙ると云つたのだ。此の句の如きは其角の氣象が最も好く現はれて居る。又世間によくある知らぬ人に厚かましく慶弔の句を乞ふ者の誠めともなつて居る。蓋し慶弔と云ふ事は知つた同士の互ひにする事で、知らぬ人に強ひるのは無理である。よし又慶弔したとても其詞は虚偽である。虚偽の詞は貰つた側でも有り難くないぢやないか。然るに今日に

於てもよくこんな慶弔の句を私共へも求めに来る人があるので、私はいつも此の其角の句を引き事にして断つて居る。尙ほ今日の流行としては、人の死亡したのを殆んど知るか知らぬかと云ふやうな疎遠な處へまで知らせ、而して一人も會葬者の多いことを誇ると云ふ風がある。けれど其會葬者の腹の中では矢張「六尺も力落しや」位をつぶやいて居るのだから可笑しい。

其角の句の「猿蓑」にあるものに就てはまだ解きたいものもあれど且らく措いて、今回は「炭俵」に見えたものを解かう。此集は「猿蓑」の刊行より三年経つて後の刊行で、孤屋、野坡、利牛の三人で編纂したと云つてある。而して此三人は蕉門なるにも拘はらず、兎もすれば

俗趣味に傾いた句を作つた輩で、即ち「炭俵」にある彼等の句を見てもその證明が出来る。

目下にも中の詞や年の辭宜 孤 屋

目下は我より目下に立つ人、年の辭宜は年の始の辭宜、即ち挨拶である。

長松が親の名でくる御慶哉 野 坡

嘗ては長松くと呼んで居た彼が、しかつめらしく親の名の何兵衛などと名乗つて来たのである。

柿のなる本を子供の寄り處 利 牛

柿の實に對して子供は意地穢ないが、又正直だ。

はき掃除してから椿散りにけり

野 坡

うまい好い事をしたと云ふのである。

いづれも人事の穿ち、氣の利いた見つけ處と云ふに過ぎない。そこで此集の出來た年末に芭蕉翁は歿したのであるが、之を月並派から見たら蕉風最後の一進歩とも云ふのであらう。けれど吾々からは却て其衰兆だと歎息するのである。然し「炭俵」に於ても彼等こそ斯様な句風を始めたれ、其他の蕉門の高足たる人々は決してそれに同化せない。就中其角の如きは舊に依て己が句風を主持して居たのである。

### 葛城の神は何れぞ夜の雛

葛城の神とは大和國葛城山に祭つてある神で、此神は至つて醜い顔だと傳へられて居る。そこで句の意は、今や彌生の節句で雛人形が數々祭られて居るが、どれもく皆美しい顔計りだ、中には些つと醜いのもあるべきだにそれが見當らないと云ふ、其醜い顔のことを葛城の神と云ひ做したのである。こゝが作者の技術で、爲めに如何にも心の深くして餘情を帯び、又一面には品致ある滑稽をも感せしむるのである。而して葛城の神は自ら醜きを耻ぢて夜のみ出づると云ふ事より、特に「夜の雛」と置いた處にも其注意がある。要するに古人は此の如く歴史的故事を利用して句の趣味を助けることが多かつたが、輓近の俳人達はそれが段々となくなつて行くやうだ。尤も各の個性さへ歌へ

ばそれで可いといふかも知れぬが、歴史故事を知つた個性と知らぬ個性とを比較したら、矢張歴史故事を知つた個性の方に趣味も富んで居て、それ丈十七字詩形にも出来榮えがある筈だ。單に個性を吐くのみになら何も十七字詩形と云ふ面倒なものを借るには及ばぬぢやないか。處が既に詩形を借る以上は、成るべく趣味の豊富を求めて、歴史故事其他あらゆる社會の事物にも通曉して、古人に耻ぢない句を作りたいと、私は思ふのである。

### 笹の葉に枕つけてや星迎へ

星迎へは例の七夕祭の事で、牽牛織女の二星をお迎へ申すと云ふ意である。

ある。而してそれには笹を高く立て、歌など書いた色紙短冊や其他種々の物を附ける。これは維新前には都鄙に通じて總ての人家に行はれたものである。そこで句の意は、今宵星迎へするのであるから、其笹の葉には枕をも附けたら好い、と云ふのを「附けてや」即ち附けたかどうかと疑問法に歌つたのである。一體此七夕の事は支那の傳説で、二の星が天の河原で出會して戀を遂ぐると云つてあるから、それには定めし枕も要するだらう。幸ひ空高く立る笹の梢に於て其用意をして置けど、多少滑稽趣味を帯びて歌つたのである。此句の如きは故事の關係があるとは云へ、餘りに瑣事に涉つて枕とまで想ひ寄せたのは、俗的穿ちに落る嫌ひもあれど、元來星に枕を貸すとは突飛な考へで、此



突飛が却て詩趣にも適つて、従つて月並家などには逆も企て及ばぬ處があるのだ。然し前の「葛城」の句は趣向に比すれば、此句は委曲に過ぎて思考を要することの多い丈それ丈劣つて居るやうに思はれる。

### 時鳥 一一の橋の夜明哉

此句は、今時鳥の鳴く聲を聞いたが、こゝは一の橋二の橋と懸つて居る川筋で、周囲の光景と云ひ、如何にも其心持が好かつたと、或る即景即興を歌つたのである。成程吾々が身を其處に置いて考へて見ても、初夏の曙の活き／＼した趣が眼にも心にも浮かんで来る。此句は作者の句中で最も正風の奥旨を得たものと云つても可からう。序なが

ら云ふが、先年此句が文部省編纂の教科書に載つて居ることに就て議論が起つた。それは誰か、此句は其角が吉原戻りの作で、「一二の橋」は墨田川のたと誤り唱へた事から、それでは教育上に相濟まぬと云ふ議論となり、當局者も多少心配して私へも内々句意を尋ねられたことがあつた。けれどもそれは一笑にも當らぬことで、句中に吉原などあれば格別、何等夫等の文字もなく、單に作られた時が吉原戻りだと云ふ丈で、教育をナゼ害するであらうか。此句の如き詩趣は少年の頭へも早く吹き込んで置くのが、一つの教育どころなれ、教育に害あるなぞとは馬鹿氣きつた議論である。要するに句と教育との關係は句の内容の如何にあつて、作られた時の穿鑿の如きは絶対に無用だ、と答

へて、又一二の新聞へも私の意見を發表したことがある。若し作られた時を穿鑿したら、雪隠で案出した名句などを人に示すものは無禮至極と云はねばなるまい。加之此其角の句に於ては實は作られた時清淨潔白なので、それは伊藤松宇氏であつたか其後考證せられた處では「一二の橋」は全く伏見の川筋なのであつた。右一件は既に熟知の人も多いのだが、句解上の關係からまだ知らぬ人に告て置く。

其角は蕉門中で氣骨のあると共に磊落漢である。故に他人では踟躇して言ひ得ぬことも其角は平氣で言つて、且つ何でもかでも句とすると云ふ技倆がある。就中穢ない事物を句に入れたものも随分多いから今回はそれを解かう。尤も芭蕉に於ても或る旅の宿りのいぶせさを啣ちては、

蚤虱馬の尿する枕元

芭蕉

なごご云ふ句もあるが、其角のは更に甚しいのである。

### 小便も笕にあまる五月雨

これは小便を流す笕があつて、それへ五月雨の水がまじつて勢を添へた處を云つたのであらう。霖雨の頃の佗びしさを小便を以て現はすとは随分奇想じやないか。(十牛の關係は略す)

### 小便に起きては月を見ざりけり

睡むいながらもやつと起き出でて用を足した趣が十分に譯かる。此句などは無風流中に風流を歌つたものである。

初雪に此小便は何奴ぞ

雪の上へ黄色に垂れてあるそれを罵つたので此語勢丈でも其角の度胸が十分に現はれて居る。或は自ら垂れて置いて知らぬ顔に歌つたのかも知れぬ。さう見れば愈々其角的だ。

かに糞にうつろふ花の妹哉

かに糞は赤ん坊の産れた時始めてする糞で、此糞を見る時は花の如き吾妹子の色香もその衰へを見せて、躰ちうつろひ行く感がすると云ふのだ。碎いて云へば、子を産んだ嗅アはモウ駄目だと歌つたのであるが、それを「うつろふ花の」などと雅言で云ふから句として聞かれるのである。これに付けても最近の俳人の俗語丸出しで鄙隈な句を聞かざるゝには閉口する。

餅を屁と宿は聞き分く事ぞなき

餅搗く音と屁の音と聞き分かぬと云ふことか、或は餅焼く匂いと屁の匂いと聞き分かぬと云ふことか、ごつちにしても佗ひた宿では餅と縁遠く、それをば餘所事に聞き做し居ると云ふのであらう。これにも十

分磊落の氣象が現はれて居る。

曉の反吐は隣か時鳥

反吐は咽から物を吐くことで、此處では朝の嗽をして「ゲーッ」とか「ガーッ」とか云ふのを聞いたのであらう。折節時鳥が鳴き渡つて、好い事して居る耳へ、穢ない聲を聞かせるのは誰だ、隣の奴はさてく無風流漢であると云つたのである。

行年に唾吐くらん鏡磨ぎ

此句は一寸分りかねるが、蓋し鏡磨ぎが鏡面に向つて唾きして潤ひを與へることを、折節の行年に取合はせて、此鏡面の一年中の老いた顔へは唾きして追つ拂ひ、更に新しい年の若い顔を磨き出させたいと云つたのであらうか。尤も顔の字はないが、鏡の連想から顔へ聞かせ、更に其顔を行年の年へ懸けたものと思はれるのである。此他は諸彦の教へを待つ外はない。

秋の暮祖父のふぐりを見てのみぞ

秋の暮は淋しくて見るものもない。只だ老人のむさくろしき一物を見てのみぞあると笑つて云つたのである。此祖父は作者の内のでなくて、近所合壁に痲氣持ちの親仁杯が居れば、夫を歌つたとして可いの

である。「見てのみぞ」が如何にも軽い。

さためよの遺精もつらし寒の水

此句に至つては愈々ひどい物を持出したが、「さためよの」が十分に分らぬ。或は「定め夜」で、月に何回どの規定を云ふのであらうか、それでは遺精を寒の水に配合したと云ふのみで、ちつとも美化された點がない。流石の其角も失敗の句である。

俳句評釋(終)

南 柯 俳 話

武 田 鶯 塘

南 阿 將 蓋  
九 田 森 世

一 俳句と自然

俳句と云ふものゝ上の立場から、自然と、人間との關係を靜かに考へて見る。

國亡んで山河空しくありと云ふやうな、そんな深味の無い感想は別として、人間を離れて自然が存在するか、自然を離れて人間が生息し得るかど云ふ問題は、鳥渡其の解決に苦しむところであると思ふ。

人間は或時代に於て、其の功利心を満足せしめんが爲めに、自然の凌駕を誇りとし、自然の征服を潔しとするが、第二の時代に於ては自然と迎合し、自然と同化しやうと努め、又或者は自己が自然に對する

句評及俳話

権能のいかばかり大なるかを試みるが爲め、恃み難き文明權衡の上に燃ゆるが如き青春の血液を投せんとし、或者は人生獨立の要求を外にして、精神の滅却と靈魂の壓迫とを、自然の偉能によりて慰藉せんとしつゝあるのである。

如斯き矛盾や錯誤やを繰返して、人間は終始自然と離れる事が出来ずに居る。自然は亦人間のこれ等慘虐なる態度、悍猛なる功利心に對して、何等の憎悪怨恨をといめず、飽くまでも寛容の態度を示し、自由なる愛の兩手を擴げて、人間權力の濫用にもなほ且つ共鳴を與へて居るやうにも思はれる。

海嘯とか、地震とか、颶風とか、噴火とか、洪水とか、たまく指

を人道正義の上に染めて、責罰の表現を示すことがないとも限らぬがこれとても人間の日にく揮ふ、暴威と暴力とに對しては、極めて輕微なる復讐に過ぎぬ。けれども、また一面から云へば、大なる自然に對する人間の暴力、それは極めて貧弱なものであつて、高く自らを標置した小なる人間が、自然の心臓を貫いたとばかり信することだも、其の實は自然の皮膚の上皮にも及んでゐぬかも知れぬ。而して肉と靈との戦慄は却て人間の上に強烈であるかも知れぬ。

不快なる飛行機の音響、それは人間より云へば、空中征服の聲であつて、人間偉能の手が空中に迄伸びた表現とも云へやうが、自然は果して、かうしたものによつて征服されべきものであらうか。自然が生

んだ大鵬がよし北溟を越ゆるに當つても、さうした不快な音響を下界に漲らせ、さうした堪へ難き臭氣は放たぬであらう。人間の知識が自然と一致せぬ限りは、何處迄も人間が同じ人間に誇るべき権能であつて、自然に對しては殆ど無價値であるといふの外はない。

そこで此の文明の權衡の上に、自然と闘うて破れたる人。自然と闘ふの勇氣なき人。乃至自ら争ふの愚なるを悟れる人。寧ろ自然の寛大なる光りに浴して、人生の繁錯より逃れんと試みる人。更に其明白なる方向に生活の靈妙を感得せんとする人。辨別なき精神の衝動によつて猥りに超自然的たらんとする人。舊き信仰に破れ、新らしき信仰を得んとして得られず、煩悶困憊の極、慰安を自然に覓むる人。其形態に

於ては各々異るところはあるにしても、皆これ畢竟自然と眞理との適合を目的とし、其の盜るゝが如き高き感情と、燃ゆるが如き自由の愛とを、自然の權能に委せんとするもの、さうした人々に哲人がある。詩人がある。而してまた畫家があり俳人がある。

繪畫を若し無聲の詩としたら、詩は有聲の畫であらねばならぬ筈である。けれ共これを自然そのものと對照して、仔細に觀察するとしたらばどうであらう、其の間に多少の軒輕を生じはすまいか、人間の自然に對する感想、それが繪ともなり、詩ともなり、歌ともなり、俳句ともなるのであるから、或は一致した表示を見ぬとは限らぬが、多くの場合多少の相違がなければならぬ。詩を翻譯した俳句や和歌、和歌



や俳句から脱胎した詩歌の上に、却つて味の深いものもあるには相違ないが、それは始めから詩によつて表現されるよりも、和歌俳句によつて表現され得べきものか、和歌俳句によつて表現されるよりは、寧ろ繪畫によつて表現され得べきものであつて、其間多少の相違がどうしてもなければならぬ筈である。

今俳句の上から云ふと、其の始め連歌から生れた俳句が、寧ろ感傷的に傾いたといふことながら實は不思議であつて、宗鑑や、守武の句、連歌の舊套を脱したとは云へ、なほ悅樂的構想を旨としたのは、その精神をなほ連歌の上に置いた證據である。そしてまた彼等には靈魂の衝動を自然と一致共鳴せしむるだけの勇氣と徹底とを缺いて居た

らで、芭蕉に至つて、始めてその自然の明白なる方面に生活の靈妙を感得した。けれども、俳聖なほ人間である以上、此大なる自然に對して、眇たる自個存在の意義を感得すると同時に、いかにせば「我」と「自然」とは同化し得るであらうか。「我」の靈魂を自然に結びつけて、そして其表示を何處から見つけ出さうかと云ふ事に、先づ苦心せざるを得なかつた。彼が胸中に燃ゆる眞誠の愛と同情とは、第一彼が自然と結ぶべき武器として閃いた。而して彼は憐憫、感傷、悔悟、超人間的感傷を背景として俳壇に立つた。即ち俳句がそのまつたく連歌の悅樂的感傷を難れて、感傷的となつたのも、一つはさうした歴史にもよるのである。

古池や蛙飛び込む水の音

道の邊の木槿は馬に喰はれけり

此の二句は蕉風の奥義として、古來尊重され人口に膾炙されてゐる句であるが、この句からして既に感傷的である。古池の吟の如き自然の幽玄と天地の静寂とに一致した古今の名句であるにしても、芭蕉が感傷的思想は其蛙の池中に跳り入つた音をどうしても悦樂的に解釋し得る事が出来なかつた。

瘠蛙負けるな一茶こゝにあり

悠然こして山を見る蛙哉

と云ふやうな暢然とした一茶の氣分には、芭蕉はどうしてもなれなかつた。そしてまた、

閣に座して遠き蛙を聞く夜哉

日は日暮れよ夜は夜明けよと啼く蛙

と云つたやうな、蕪村の平淡な打開いた心にもなれなかつた。此の古池の吟に臆測を下して當時芭蕉が俳風の革新に苦慮焦心の餘り、一夜呻吟して居たところが、不圖蛙の池に入る聲を耳にした。かうした場

合の句であるから、自づから感傷的たらざるを得ぬと断じた俳士もあるが、談林の範圍から逸れて、蕉風に悟入した彼が最初の句としたら無理からぬ事とも云へやう。

又次の木槿の句に至つては一面より觀れば感傷的と云はんよりは、寧ろ慘虐に近い感じがする。これは元より芭蕉其人の精神ではなく、馬上遊樂の即興として、只彼の乗つてゐた馬が木槿を啄んだと云ふに過ぎぬであらうが、この句を俳諧の奥儀として尊重した時代の精神を疑はずには居られぬと云ふ俳士もあり、既に子規氏は此句を評して、『此句は解すべからずと雖も、我考にては教訓の詩歌は文學者以外の俗人間に傳播して、過分の賞讃を受くること間々是ある習な

れば、此句もその種類なるべし』

と云ひ、文學上無價値として貶けたが、鳴雪翁の見解を見ると、

『此句は芭蕉が馬に乗つてほく／＼と村巷か何かをやつて行く道みちの傍かたはらに木槿もくぎが咲さいて居ゐる、その花はなを馬うまが一いち寸すんバクツイつたと云ふので旅中りょちゆうの出來事できごとをその儘ままに咏えいじたもの、野のや村むらの小徑こみちなどの景色けいしよくとして趣おもむきが深い云々』

文學上の價値無價値はさて措おいて、此句を芭蕉の代表句とした當時にあつては、かうした句に無上むじやうの生命せいめいを認め、慘虐ざんぎやくといふ感じよりは寧ろ憐憫れんぴんとか同情どうじゆうとかの感じに囚さらはれたものに相違さうみない。

物云へば唇寒し秋の風

やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲

いづれもまた眞摯の愛と同情とを基礎として憐憫、感傷の上に句作されて居る。

人の親焼野の雉子を打にける 曉臺

人聲に子を引かくす女鹿哉 一茶

これ等もまた同じ畑の産物ではあるが、さうした憐憫、さうした同情は、よし人間相互の間には強い感情を與ふる場合もあるかは知らぬが

自然に與ふる響としては極めて小なるものである。

梅が香にのつご日の出る山路哉

八九間空で雨降る柳かな

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時

春雨や蜂の巢つごふ屋根の漏

等の句に至つては芭蕉が正風に悟入した以來何等蟠りのない勞作であつて、其自然と迎合し自然と共鳴した偉力を示して餘りあるものである。而もこれ等の表現は俳句に於て獨占せらるべきものであつて、和

歌としても、繪畫としても、その律調とか、色彩とか云ふものが、かうまで深い印象を與へる事はなからうかと思はれる。

それからこゝに一言したいのは繪畫である。繪畫は其形態の上に、自然と同化し、迎合し、而してまた融和し得ることがあるにしても、表面自然に對して要求を表示するに困難であるが、和歌と俳句とは、自由に要求を表現し、またその満足を享受するの特權を有して居る。此點は文章とか長詩とかと同一歩調を取り得るので、露骨なる要求は屢々それら作物の上に絶大の權威を振つてゐる。

夕立や田を三めぐりの神ならば 其角

言傳てん答もがもなほこゝぎす 昭巴

初雪や水仙の葉のたはむほご 芭蕉

いかにも露骨な要求ではあるまいか、かうした要求に對する自然の情調は、またこの要求を享受するらしく思はれる。要求の強請に陥らざる間は、俳諧に所謂「願ひ」である。希望である。純なる、而も淡き心の表現である。また何等答むるところはないであらう。(未完稿)

### 二 國民性と俳句

國民性と旋律の關係といふことに就いては、折があつたら何かに書

いて見たい。また出来得べくんば一冊の書物として見たいと思ひながら問題が大きい丈けまだ筆をつけることが出来ずにゐる。

適確な考證や議論やを擱むことの上に、私はまだ長い時間を要さねばならぬので、そのふと心づいた感想のみを以て、そうした大問題の根底であるかのやうに見做されては甚だ迷惑するが、私の云ふこの問題は、要するに我が國民性として放すことの出来ない旋律、譬へば習慣風俗、詩歌などの上に表はれる旋律が我が國民性の大部分を占めてゐるに相違ないといふにあるので、これを俳句といふ短詩形に結びつけて、少し書いて見たいと思ふ。

國民性の發露は之を詩歌文章の上に見るのが最も惻口な仕方であつ

て、而して又最も適切であることはこゝに云ふまでもないが、この詩歌文章によつて現はさるゝ我が國民性の、常により多く旋律を以て支配されつゝある事實は、何人も亦認め得るところであらうと思ふ。

連歌若しくは俳諧なるものゝ一節が、其の連歌や俳諧の他の群れから離れて、立派に獨立し得た事實、それが明らかに我が國民性と旋律との深い關係を證據立てるものであつて、さうした不思議な現象は嘗て世界に見られぬところである。

勿論支那には律と絶句との區別はあるが、之は我が國で云ふ長歌と短歌との區別に於けるやうなものであつて、既に萬葉にも、長い歌もあれば、短い歌もある。律の一齣を詩と做し、長歌の一節を歌と做し

ても、其の意味の透徹し得ざる限りは之を一つの安定した形式として  
 獨立せしめ得る譯に行かぬのはこゝに云ふまでもない。

俳諧の群からはなれた十七字が、俳句として獨立し得たことは、畢  
 竟旋律に支配される我が國民性と迎合し、妥協した所以であつて、西洋  
 のやうに主として諧調に泥む國民の間には到底見ることを得ぬ處であ  
 る。

恚うした旋律の上に獨立し得た俳句は、我が國民性の發達と共に益  
 益達展して、強い情調や、大きな背景や、美しい同化やを齎らしたの  
 であるが、其の進展に伴ふ單調は、性の方向に逆つて、何等かの變化  
 を見ねば納まらなくなつた。

即ち彼の新傾向派の如きは、正しくさうした思想から生れた、新ら  
 しい形式の詩形であつて、旋律のみに生きつゝあつた俳句に諧調を加  
 味して此の旋律、諧調との調和を要求し、而して此の中間から新らし  
 い或物を掴まふとしたものであらうと思ふ。

新らしい形式に生きた俳句、これを異端視することは吾等の立場よ  
 りしては餘りに野蠻である、狭量である。我等は寧ろ深く感謝すべき  
 發明である。唯吾等は之を句の外様や、文字の技巧にのみ採り用ゐず  
 して、出來得べくんば取材の上にこれが調和を望みたいと思ふ。また  
 絶えず、我等は其の實行に苦心してゐる。七分の旋律にどうかして三  
 分の諧調が欲しいと望んでゐる。

根本的の國民性は永久に渝ることがないにしても其の時代々の表現によつて、色づけられ、何等かの變化を示すといふことは、極めて必要の條件であつて、また極めて自然の法則である。

雪の富士を見て、富士でないといふ人はない。夏の富士を見てまた富士でないといふ人はない。富士は何時でも富士であつて、其の四時の變化に伴ふ自然の權威は、決して富士なる靈山を傷けるものではないそれは在來の句にしても、旋律のみを以て其の總てが生かされて居るは決して云はぬ。なかには随分諧調に生きてゐるものもあるには相違ないが、要は不用意の調和に止まつて、我等の希望と合致したものを餘り多く見ないことを遺憾とする。

我等はごうしても貫一とお宮との悲劇に對して舞臺裏の單調な波の音を聞かねば氣がすまぬ。また我等は百味珍羞の上に一皿の香の物を欲して歇まぬ。目に於ても、耳に於ても、鼻に於ても、口に於ても、あらゆる感觸にさうした調和を望むことが既に國民性を超越した人間の自然の要求である以上、單に旋律のみを以て生き得られぬ。其處には疾くに諧調の必要も認めて居る。

旋律によつて獨立し得た俳句は、既に其の生命の根本義を安定の地位に置いて居る以上、これに三分の諧調を加ふるといふことは、さまざま至難の業ではあるまい。これを諧調から生れた西洋の單詩形に、我が國の如き神秘的な、而してまた美しい旋律の其の一部だもつけ加へる



一六八  
ことから見て、我等は極めて幸福な詩形を持つて居る國民であるといふことが肯かれる。

ピアノやヴァイオリンの諧調を琴や三味線の旋律につけ加へることは容易であるが、琴や三味線の旋律を、ピアノやヴァイオリンの諧調に加味するといふことは、比較的困難である。譜といふものから生れる音楽と、譜といふものを生む音楽とは、其の間一長一短はあるにしても、主として旋律に生きる音楽が諧調に生れる音楽よりは、遙かに生命があり未來があるといふことは、こゝに云ふまでもない話である。

### 三 句に與へられたる慘虐と自由

(上)

強者が弱者に對して常に與へんと欲する「慘虐」弱者が強者に對して常に得んと欲する「自由」、其處に人間のあらゆる理智とか感情とか云ふものが働いて、始めて潑刺たる氣分が漲り、征服と獨立とが、常に相循環しつゝあるに相違ないと思ふ。

支那のある學者は、人は生れながらにして善なるものであると云ひまた或る學者は、人の性は惡なるものであると云つて居るが、動物が生れながらの本能は善でもなければ、惡でもない。唯此「虐げ」にあ

る。あらゆるものを虐げて、自個の存在を安定せしめ、そしてまたこの「虐げ」から快樂を覓めやうとするにあるので、善と云ひ、悪と云ふものよりは、もつと單純な、而してもつと慘忍なものであらうと考へられる。

この「虐げ」の本能は、下等動物から高等動物に進むに従つて烈しく働き、人類に至つて最も甚だしいと云ふ事は、小兒の時代、よく蟲や金魚を捻り殺しては、快を食ぼるに見ても明らかな話である。

弱き者を虐げんとするの本能、これに次いで來るものは「虐げ」に對する反抗及び防禦である。征服の後に來るものに獨立があると同じ意味の下に必ず來る。此本能の働きは、矢張り下等動物よりも高等動

物に烈しく殊に人類に至つて其最大限度を示して居るやうに思ふ。

強者にも階級があり。弱者にも階級がある以上、「虐げ」と「反抗」

とは一から二、二から三といふやうに、常に相蝕して、慘虐の苦痛から甦る自由に、人は多く生きて居るのである。強烈な酒の中から、甘い味を得て見たいと考へたり、荆棘の間から美しい薔薇の花を覓めて其處に無上の満足を覓めやうとしたりすることは、啻に人間の好奇心のみではない。そしてまたこの「自由」に對する「虐げ」と「虐げ」に對する「自由」とは必ずしも人間に戰を好ましむるものとは限らぬ。其明白なるものは、又その公平なるものは、多くの場合互に相平衡して、其處に一種の調和を齎し、動かすべからざる人道と不文律とを

生んで居る。

詭謀、野心、凌駕、陥穽、誹謗、これ等は弱者が強者に對する偏狹なる反抗である。小さき「自由」を覓めんとする聲である。同情、憐憫、愛撫、救恤、偽善、これ等は多く強者が弱者の反抗を防ぎ、且つ柔ぐべき淺薄なる手段の響である、低級なる「虐げ」の結果である。けれどもかくして進みつゝある社會は、假令かくの如く不徹底なるものにもせよ、この二つの本能を否定することは出来ぬ。事物々凡て渦のやうに際限もなくかうした本能の下に動かぬはない。そしてたゞその平衡を失し、その中庸を喪つたものが鬭争を招き、戦役を醸すと云ふやうな嫌もあるが、自然の秩序も制裁も、曾て徹底

せるこの二つの本能によつて紊亂さるゝものではなく、寧ろこの二つの本能の調和によつて進展せられつゝあることはこゝに云ふまでもない。

一黨より一黨を生み、一派より一派を産し、更に一流より一流を岐つと云ふやうなことは凡てこの「虐げ」と「自由」との接觸から起る現象であつて、また凡ての進歩を意味せぬものはない。弓馬槍劔から琴曲書畫に至るまで、由來かうした變遷を閲し、かうした歴史を経て、始めて今日の絢爛たる文學を見たのである。發明にせよ、藝術にせよ、他よりは超越した獨特の形式内容に於て生きると云ふ事は即ち弱者としての「獨立」であつて、強者としては力強い「防衛」でなければならぬ。

らね。

言語に對する文章の「虐げ」、文章に對する言語の「自由」、これが調和として生れた言文一致體は、遂に今日の流行を見るに至つた。文章が敢て言語を征服した譯でもなければ、言語がまた敢て文章に降服した譯でもなく、自然にかうした進歩を見た。けれ共未だ此の言語と文章との間には大なる「虐げ」と「自由」との要求が認められねばならぬ。

詩に於ても、短歌に於ても、凡てさうした要求の接觸と調和とによつて進みつゝあるに相違ないが、殊に注意すべきは俳句のそれであると思ふ。

連歌から生れた俳句が、僅々十七文字の内に其獨立の生命を保持すると云ふ事が、既に非常な反抗であり、自由の要求であるので、また全體から云へば無理な注文である。文章や連歌やらの「虐げ」から「自由」を覓めて、一天地を拓いた俳句の「反抗」や「獨立」やは、

さらばこゝに檀林の木あり梅の花

といふやうな殆ど文章の一節に近いものから起されて、漸く詩形の一體を成すに至つたが、實は其の當時なほこれによつて満足されてゐなかつたであらう。連歌の桎梏の下に、僅かにその覺醒の眼を睜つた位なものに過ぎなかつたに相違ない。けれどもそれは既に「自由」であ